16　院内各部署の業務実績

院内各所属一覧（掲載ページ）

	ページ	所　属
診療部	48	内科統括
	50	糖尿病・内分泌・血液内科
	51	呼吸器内科
	52	消化器内科
	54	腎臓内科
	56	神経内科
	58	精神神経科
	59	循環器内科
	61	心臓血管外科
	63	小児科
	65	外科
	67	整形外科
	68	形成外科
	69	脳神経外科
	71	皮膚科
	72	泌尿器科
	74	産婦人科
	76	眼科
	78	耳鼻咽喉科
	79	放射線科
	81	麻酔科
	82	病理診断科
	83	歯科口腔外科
	84	手術管理科
	85	非常勤医師・臨床研修医
診療技術部	87	臨床検査科
	89	中央放射線科
	91	臨床工学科
	93	リハビリテーション科
	95	栄養科
	97	医療技術科
	100	薬剤科

	ページ	所　属
看護部	102	看護部長室
	106	外来
	107	手術室
	108	中央材料室
	109	ＩＣＵ（集中治療室）
	110	３Ｂ病棟
	111	４Ａ病棟
	112	４Ｂ病棟
	113	５Ａ病棟
	115	５Ｂ病棟
	116	６Ａ病棟
	118	６Ｂ病棟
	119	７Ａ病棟
	120	７Ｂ病棟
	121	３Ｃ病棟
事務部	122	病院経営課
	123	病院総務課
	124	医事課
	126	地域医療連携センター
	129	医療安全対策室
	131	院内感染対策室（ＩＣＴ）

■内科統括

1　診療の概要

これまで通り、消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科などの内科系診療科がそれぞれ高い専門性を発揮すると同時に、相互に協力しながら内科全般の多様な疾患に対応した。

2　平成 30 年度の診療実績

（1）診療体制の充実

・消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科領域における専門的な診療を行った。

＊糖尿病・内分泌内科と血液内科は糖尿病・内分泌・血液内科として連携して診療を行った。

・リウマチ・膠原病内科非常勤医師による診療を継続した（毎週火曜日）。

・救急外来当番（平日９時～17 時）：これまでと同様平日午前、午後各１名が救急外来の診療を担当した。

・当直・副直（休日と平日の 17 時～９時）：これまでと同様当直医１名、副直医１名とし、副直医は昨年度に引き続き平日は 17 時から 21 時まで、休日は９時から 21 時まで病院にとどまり診療した。

・初診外来（平日午前）：平成 25 年４月より２名体制で診療を行った。

（2）内科の医局会とカンファレンス

・内科医局会（毎週火曜日 17 時 15 分から 18 時 30 分）：薬剤の適正使用等に関する勉強会、連絡事項の伝達、懸案事項の打ち合わせ、症例検討を行った。

・診療部長・病棟長会議：重要案件に関して随時開催、意見を集約した。

・早朝カンファレンス：水曜８時からの勉強会を行い、後期・初期臨床研修医を中心に診療知識向上に努めた。

3　研修・教育

（1）診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）：平成 28 年度に始まった消化器内科による東京慈恵会医科大学の学生受け入れを継続した。また、腎臓内科が聖マリアンナ医科大学６年生１名を受け入れた。

（2）初期臨床研修：管理型６名に加え、腎臓内科が沼津市立病院から協力型５名、消化器内科が聖マリアンナ医科大学病院から協力型１名を受け入れた。

（3）後期臨床研修：平成 29 年から日本内科学会に対し基幹施設として専門研修プログラム「富士市立中央病院内科専門研修プログラム」を登録し、連携施設として「東京慈恵会医科大学附属病院内科専攻医研修プログラム」、「静岡県立総合病院

内科専門研修プログラム」、「国際医療福祉大学熱海病院内科専門研修プログラム」が登録された。

4　来年度の課題

（1） 診療体制を整備する。

・診療ブースを増やし、消化器内科、リウマチ・膠原病内科の患者増加に対応する。

・入院患者数の増加に伴い病床配分の見直しが行われる。

（2） 研修・教育体制を整備する。

・臨床研修医（基幹型・協力型)、医学生の診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）の研修・教育態勢を整備する。

（文責　笠井　健司）

■糖尿病・内分泌・血液内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	藤井　常宏	部長	辻野　大助
副部長	山城　秀樹	専任医師	関口　賢介
専任医師	大野　隆行	専任医師	所　一将

2　平成 30 年度の診療実績

（1）外来診察（専門）

藤井医師（悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、自己免疫性血小板減少性紫斑病、多発性骨髄腫、急性、慢性白血病等）、辻野医師（糖尿病、内分泌疾患、妊娠糖尿病等）、山城医師（糖尿病、一般疾患）、関口医師（糖尿病、内分泌疾患）

（2）地域医療連携室経由での紹介外来患者総数

藤井医師 186 名、辻野医師 194 名、関口医師 42 名

（3）主な患者統計（新規患者数）

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
糖尿病	642	628	634
悪性リンパ腫	73	48	36
特発性血小板減少性紫斑病	47	47	51
骨髄異形成症候群	15	22	20
多発性骨髄腫	14	22	19

3　来年度の課題

（1）外来受診患者への対応：糖尿病の外来患者が多く、開業医からの紹介患者が増加している。富士市在住の患者が中央病院に集中している現状を踏まえ、市役所職員、富士市医師会と協力して、本年度、糖尿病　病診連携ネットワークを構築した。今後とも、病診連携を行っていく上で問題点を抽出し改善していく。

（2）入院患者への対応：糖尿病内科としては、平成 30 年度に新たな病棟医を３名迎え、新しい体制で診療を開始した。当院への糖尿病の紹介患者は、健康診断や症状自覚を契機として近隣の診療所を受診し重度の糖尿病を指摘されるケースが特に多く、初めて糖尿病の診療を開始する方々となる。初期の段階で診断すること、合併症が進行することの重大性、患者自身の病気の理解が重要であり、チーム医療を充実させるとともに富士市全体の病気への関心を高める工夫が必要である。

（3）血液内科では近隣の血液内科外来の閉鎖で紹介患者数が増大したため完全予約制を令和元年度から実施する。今年度は血液内科医が慈恵医大より１名派遣され、２名体制で診療に当たる。引き続き慈恵医科大学からの血液内科医師の派遣を継続してゆく。

（文責　藤井　常宏・安藤　精貴）

■呼吸器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	木村　哲夫	副部長	髙坂　直樹
医長	渡邉　直昭		

2　平成 30 年度の診療実績

呼吸器内科は、一般的な肺炎から当地域に多い気管支喘息、慢性気管支炎、肺気腫といった慢性呼吸器疾患や、肺結核、肺非結核性抗酸菌症、気管支拡張症、肺がん等の診断及び治療を行っている。

気管支拡張症等による喀血に対しては、放射線科に依頼して気管支動脈塞栓術で止血処置を行っている。

また、慢性気管支炎・肺気腫・間質性肺炎等で、慢性呼吸不全状態にある患者に対しては、在宅酸素療法（HOT：Home Oxygen Therapy）を導入し、家庭での酸素投与を可能とし、生活の質の向上を図っている。

肺がんに関しては、気管支内視鏡で診断し、治療は主に静岡県立静岡がんセンター（駿東郡長泉町）と連携し、総合的な治療を目指している。

当院は静岡県東部地区で唯一結核病棟（10 床）を有しており、近年再び増加しつつある結核に対しても治療を行っている。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
気管支内視鏡検査	49	57	67

3　来年度の課題

令和元年度も常勤医師３名による診療体制が継続可能となるため、引き続き安定した診療を行うことによって、地域医療に貢献する所存である。

（文責　木村　哲夫）

■消化器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	佐伯　千里	医長	金井　友哉
医員	青木　祐磨	医員	桐生　幸苗
医員	土屋　学	専任医師	三國　隼人
専任医師	渡邊　俊宗		

2　平成 30 年度の診療実績

平成 25 年度の９年ぶりの診療再開から６年目を迎えた。消化器内科における患者数増加も鑑みられ、平成 30 年度は常勤医が６名から７名に増員された。東京慈恵会医科大学消化器・肝臓内科および内視鏡科から派遣された７名の常勤医師および４名の非常勤医師で診療にあたった。

入院診療に関しては、主に７Ｂ病棟で診療にあたった。入院患者数は毎年、約 100 人ずつ増加傾向にある。

消化器内科専門外来は月から金曜日の全ての外来診察日で行い、内視鏡診療に関しても定時枠を設置し全ての外来診察日に行った。

肝生検やラジオ波焼灼術等については新たに新設した１階のエコー処置室(12 室)にて行った。

平成 30 年度の検査・治療件数としては、緊急止血術、各種 ESD に関しては例年とほぼ同様の件数であった。大腸ポリペクトミーの件数は例年よりも 100 件程増加となった。また、EUS、ERCP といった胆膵内視鏡の検査・処置も前年に比し増加した。

外来診療では消化器専門外来として幅広く診療を行い、紹介率は 70%、年間紹介患者数は 938 人であった。

内視鏡治療

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
内視鏡的止血術	107	135	119
胃 ESD	31	22	25
胃 EMR	7	4	8
大腸 ESD	14	12	17
大腸 EMR	235	240	365
食道 ESD	4	5	5
食道 EMR	2	0	0

胆膵検査・治療

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
ERCP	277	290	464
EUS	113	130	190

経皮的ドレナージ

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
PTCD	6	15	17
PTGBD	93	90	107
PTAD	6	5	20

肝癌治療

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
RFA or PEIT	34	27	27
TACE or TAI	58	51	43

3　来年度の課題

平成 30 年度は EUS、ERCP といった胆膵内視鏡の検査・処置が著名に増加し、静岡県全体でも上位となる件数であった。来年度も実績を維持できるよう取り組んでいきたい。

診療再開後、当科で診断および治療を受けた患者さんについては疾患別、治療別にデータベースを作成してきた。6 年分のデータをもとに様々な解析を行うことにより臨床へフィードバックしたい。

（文責　金井　友哉）

■腎臓内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	笠井　健司	副部長	高橋　康人
医員	嵯峨﨑　誠	専任医師	増田　直仁
専任医師	土谷　千子		

2　平成 30 年度の診療実績

富士市 CKD（慢性腎臓病）ネットワークによる市内医療機関からの紹介に加え、市外からの紹介も依然多い状況が続いている。その結果、慢性透析導入患者数は依然増加傾向にあり、今年度は 2 名に腹膜透析を導入した。また、急性腎障害 AKI はもとよりさまざまな疾患・病態に対する急性血液浄化療法の要請が増加し、他診療科と連携して対応した。なお、腎生検患者数は横ばいであるが、組織所見に基づくより適切な治療が行えるよう慈恵医大腎臓・高血圧内科との緊密な連携体制整備を進めている。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
血液透析施行患者数	295	343	263
血液透析施行回数	2,776	2,868	2,799
腹膜透析患者数（年度末）	17	13	12

慢性透析導入患者数	97	99	94
血液透析／腹膜透析	94/3	99/0	92/2

急性血液浄化施行患者数*	62	47	72
持続血液濾過透析	46	38	49
エンドトキシン吸着	4	2	7
単純血漿交換	3	4	2
二重濾過血漿交換	6	1	6
血液吸着	1	0	0
LCAP	2	2	8

*急性血液浄化療法施行件数に関しては各科管理の症例を含む

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
手術件数	90	100	102
血液透析アクセス	85	96	97
腹膜透析アクセス	5	4	5
腎生検	37	36	35

腎臓病教室	12	12	12

CKD 紹介（透析を除く）	218	280	242

3　来年度の課題

（1） 腎病理検査の精度を向上させ、腎臓病に対する早期治療介入の体制を強化する。

（2） 富士市 CKD ネットワーク、富士市糖尿病ネットワークと連携し、糖尿病性腎症重症化予防対策を推進する。

（3） 富士市透析防災ネットワークの活動に協力し、災害時にも透析医療を維持できる体制を整備する。

（4） 臨床研修（基幹型・協力型)、医学生の診療参加型臨床実習の円滑な受け入れと教育体制の整備を図る。

（5） 腎臓病療養指導士の育成を推進する。

（文責　笠井　健司）

■神経内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	河野　優		

2　平成 30 年度の診療実績

平成 30 年度は部長のみで外来診療を行った。

外来は、火曜日を除く月から金曜日の週４回、主に紹介制をとり、物忘れ、しびれ、歩行障害など様々な神経症状を主訴とする患者の診断、治療および経過観察を行った。

入院に関しては、上半期は内科各科からの協力を仰ぎ、下半期は神経内科専任医師・当院研修医が主治医となり治療を担当した。平成 30 年度の病院統計では内科ならびに神経内科での入院患者を合算して報告している。

また平成 28 年度から日本神経学会・准教育施設の認定を受け、専門医教育施設として活動しており、当院での研修が専門医習得につながる環境が確保された。

（1） 疾患別入院患者数　（人）

		平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
血管障害	脳梗塞/脊髄梗塞	74	122	111
	脳出血	1	1	1
	一過性脳虚血発作	3	3	7
感染・炎症性疾患	脳炎/脳症	6	3	14
	プリオン病	2	1	4
	髄膜炎	10	11	6
変性疾患	認知症	1	1	3
	パーキンソン病関連疾患	7	16	36
	脊髄小脳変性症	1	0	0
	運動ニューロン病	9	4	1
脱髄性疾患	多発性硬化症／視神経脊髄炎	11	7	13
末梢神経障害	ギランバレー症候群	5	2	4
	慢性炎症性脱髄性多発神経炎	0	3	4
筋疾患	筋炎	0	4	4
	重症筋無力症	1	5	2
発作性疾患	てんかん／痙攣発作	20	22	34
その他		31	26	12
計		182	231	256

（２） 特殊種検査実績 （件）

	脳波	針筋電図	神経伝導速度
外来	99	16	80
入院	111	1	18

（３） 臨床調査個人票作成

神経疾患の多くは難病として特定疾患治療研究事業の対象となっており、臨床調査個人病の作成総数は新規・更新を併せて 210 件であった。

３ 来年度の課題

（１）常勤医師の増員

（２）内科入院主治医との連携徹底

（３）神経診療の啓発、教育

（４）富士市難病連との交流

（文責 河野 優）

■精神神経科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	外岡　雄二		

2　平成 30 年度の診療実績

平成 27 年４月より、外来診療を再開。

（１）外来診療：週４日　　※金曜日は午前のみ、非常勤医師が診療。

対象疾患：統合失調症、気分障害、神経症、認知症、精神遅滞、てんかん、アルコール依存症、症状精神病など。

（２）入院患者診察：毎日。

対象疾患：当院で入院治療中の患者さんの精神症状の病状管理。不眠・不穏・不安・抑うつなど。

（３）外来の診療統計総計：3,069 名

月別診療数　　（人）

年度＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
30	235	274	247	262	263	229	273	272	247	262	243	262	3,069
29	222	222	226	239	244	224	215	259	240	239	214	239	2,783
28	188	174	203	196	215	218	214	221	222	214	206	253	2,524

3　来年度の課題

当院には精神科の入院病床がないため、入院治療が必要な精神疾患患者の治療には対応できない。また、常勤医師が１名のため、夜間・休日の対応もできない。今年度も引き続き近隣の精神病院との連携を密にして、対応困難な患者の入院治療への対処をスムーズに行えるよう、図っていく方針である。

（文責　外岡　雄二）

■循環器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	三川　秀文	部長	阪本　宏志
副部長	富永　光敏	医長	山田　崇之
医長	木下　浩司(～6月)	医長	長谷川　潤
専任医師	増谷　祐人	派遣医師	谷川　真一

2　平成30年度の診療実績

富士地区の循環器疾患の救急医療を、心臓血管外科と協力し365日体制で当直を配し、看護師、放射線技師、臨床工学技士、臨床検査技師と伴にチーム医療で取り組んでいる。今年度は急性冠症候群に対し緊急冠動脈造影検査を168例に施行し、うち136例に対して経皮的冠動脈インターベンションを施行している。また、心肺停止や心原性ショック例に対しても経皮的心肺補助法（PCPS）や大動脈バルーンパンピング法（IABP）などの機械的補助装置を用いて積極的に救命に努力している。

検査では心臓超音波検査にて非侵襲的に弁膜症や心機能の評価ができ、多列型X線CT装置（MDCT：256スライス）および核医学検査などで冠動脈疾患を診断することが可能である。冠動脈疾患には多枝病変を有する症例も多く、血管内超音波法（IVUS)、光干渉断層法（OCT)、冠血流予備量比（FFR）等の画像診断を併用し、病変の形態や組織性状の把握、虚血の有無等を評価し治療に取り組んでいる。

末梢動脈疾患の治療も積極的に行い、総腸骨動脈、大腿動脈、膝窩動脈以下の病変34例にバルーン拡張やステントを用いた血行再建術を施行し、急性疾患である急性下肢動脈閉塞にも対応している。

また、今年度より不整脈医が派遣され不整脈外来を新たに開設。７月より不整脈に対してアブレーション治療を開始し、18症例に対し施行した。

当科は日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本心血管インターベンション治療学会研修施設に認定されており、循環器専門医５名、日本心血管インターベンション治療学会認定医３名、専門医２名、指導医１名を有し、学会発表も積極的に行っている。今年度は新たに浅大腿動脈ステントグラフトとリードレスペースメーカーの認定施設を取得した。教育面では他施設から医師を招き、知識および技術の向上に勤めている。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
冠動脈造影	1,033	1,138	1,003
冠動脈インターベンション	399	482	364
緊急症例（治療）	189（142）	229（177）	168（136）
末梢動脈疾患（腎動脈狭窄）	46（0）	41（0）	34（0）
アブレーション			18
ペースメーカー植え込み術	53	70	58

3　来年度の課題

今年度、不整脈に対してアブレーション治療を開始した。現在は週１回の派遣医師のため症例数に制限があるが、症例数が多く、アブレーション治療までの待機期間が長いのが現状である。また、循環器内科では薬剤難治性心不全（基礎疾患は陳旧性心筋梗塞、弁膜症、心房細動、拡張型心筋症等）で入退院を繰り返す症例が増加してきた。植込み型徐細動器（ICD）と伴に難治性心不全治療の心臓再同期療法（CRT）等を実施することで、循環器領域で、より積極的な治療が期待できる。そのため、医師の増員、特に不整脈医師の常勤を働きかけていきたいと思っている。

（文責　阪本　宏志）

■心臓血管外科

1　スタッフ

役職	氏　名	役職	氏　名
部長	田口　真吾	副部長	木ノ内　勝士

2　平成 30 年度の診療実績

当院の心臓血管外科は平成５年４月の開設以来、虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、弁膜症、不整脈手術、大動脈疾患（胸部および腹部）、末梢血管疾患（慢性閉塞性動脈硬化症、急性動脈閉塞症）に代表される成人疾患を一貫して扱っている。

平成 29 年３月までは常勤医師は部長織井１名のみであったが、同年４月からはさらに副部長木ノ内が常勤医師として赴任し、平成 30 年１月の織井と田口の交代以降、現在まで常勤医２名体制で診療に当たっている。心血管系に対する手術という当科の診療内容からすれば常勤医師２名では不十分な部分もあるが、当科手術日（火曜および奇数週の金曜）は大学から外勤医師が派遣され、また、慈恵医大副学長橋本和弘にも開心術日にはお忙しい中可能な限り手術指導に来院いただいて、滞りがなく手術を行うように努めている。さらに、６月からは慈恵 OB で当科前々部長であり富士市内で循環器クリニックを開業されている田中圭先生も火曜午後に非常勤医として勤務していただき、手術助手や救急外来の対応にご尽力いただいている。特に田中先生には夜間・休日の緊急・準緊急手術時（平成 30 年度は５例施行）にクリニックの診療の合間にも関わらずに手術助手を快く引き受けていただいており、富士市在住が１名と緊急症例発生時にはややもするとマンパワー不足になりがちな状況を迅速に助けていただき、心より感謝する次第である。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
虚血性心疾患	12	10	8
弁膜症	24	25	18
不整脈	3	2	1
胸部大動脈	4	11	6
胸腹部大動脈	2	3	0
先天性心疾患	0	0	1
腹部大動脈	11	17	11
末梢血管	27	19	12
心臓腫瘍、他	2	0	3
計（重複症例あり）	85	87	60

３　今年度の課題

常勤医師が２名のため緊急手術に対する対応力が不十分ではあるものの、病棟業務や当直を合同で行っている循環器内科医の尽力を中心に、心臓手術周術期管理に携わる各部門担当者（麻酔科医、ICU・手術室・病棟看護師、薬剤師、臨床工学技士、リハビリテーション科等）とカンファレンスや勉強会を行うことで、大動脈解離等の緊急手術症例への対応も徐々に可能となってきている。実際に平成 30 年度は、最近５年以上行えていない救急搬送されてきた院外発症の大動脈解離症例を２例緊急手術にて救命することができ、当科は勿論のこと、関係したコメディカル全ての自信に繋がったと思っている。

当院がカバーする医療圏人口（富士市 25 万人・富士宮市 13 万人）を考慮すれば、心臓血管外科領域の年間手術数は 200 例以上見込めるはずであるが、実際は当科の過去の経緯や症例集約の影響で 1/4 以下の実施数である一方で、現在の常勤医師数２名で安全に術後管理まで行うことも考えるとせいぜい 100 例が限界であるため、当面は年 100 例の開心術実施を当科の目標としたい。手術数、特に開心術症例に関しては 80%以上が循環器内科からの紹介である。院内における内科・外科の連携として好ましい反面、心臓カテーテル検査数の劇的増加が見込めない現状では、近隣施設（特に循環器内科医常勤施設）から当科に直接紹介される症例を地道に増やすことから始めたいと考える。また、この１年間富士市の循環器診療に携わり実感したことであるが、地域的な問題なのか弁膜症症例に対する手術適応がガイドラインよりも緩い印象がある。虚血性心疾患に対する冠動脈バイパス症例数が全国的にも減少傾向であることは避けられない以上、今後は院内・院外を問わずにガイドラインに準じた適応に基づき弁膜症手術症例数を増やしていくことが、当院での手術数の増加における当面の対策になると思われる。

（文責　田口　真吾）

■小児科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副部長	秋山　直枝	嘱託診療参事	千葉　博胤
医長	海野　浩寿（10 月～）	医長	松岡　諒
医長	木下　美沙子（～6月）	医長	鈴木　亮平（～１月）
医員	角皆　季樹	専任医師	竹内　博一（～９月）
専任医師	藤多　慧	専任医師	橘髙　恵美
専任医師	中村　祐輔（10 月～）	専任医師	増田　早織（２月～）

2　平成 30 年度の診療実績

基幹病院の小児科として、一般小児科診療、小児救急、新生児医療を地域で開業されている先生方、富士市救急医療センターと連携し、24 時間体制で小児患者の受け入れを行っている。また、静岡県立こども病院とも連携している。

平成 30 年度の退院数は全体で 906 件、内訳として平成 26 年７月から認可されている NICU（新生児特定集中治療室）249 件、呼吸器系 237 件、感染症 88 件、その他であり、新生児が 27.4%を占めていた。

専門的医療として、小児消化器内視鏡検査は総数 63 件（上部消化器内視鏡検査 34 件、大腸内視鏡検査 23 件、小腸カプセル内視鏡検査５件、小腸バルーン内視鏡検査１件）であった。食物アレルギーに対しての食物経口負荷試験は総数 37 件、内訳は、鶏卵 26 件、牛乳３件、ピーナッツ２件、その他（小麦、そば、エビ、イクラ、トマト、バナナ）６件であった。平成 30 年６月からはスギ・ダニの舌下免疫療法を行っている。

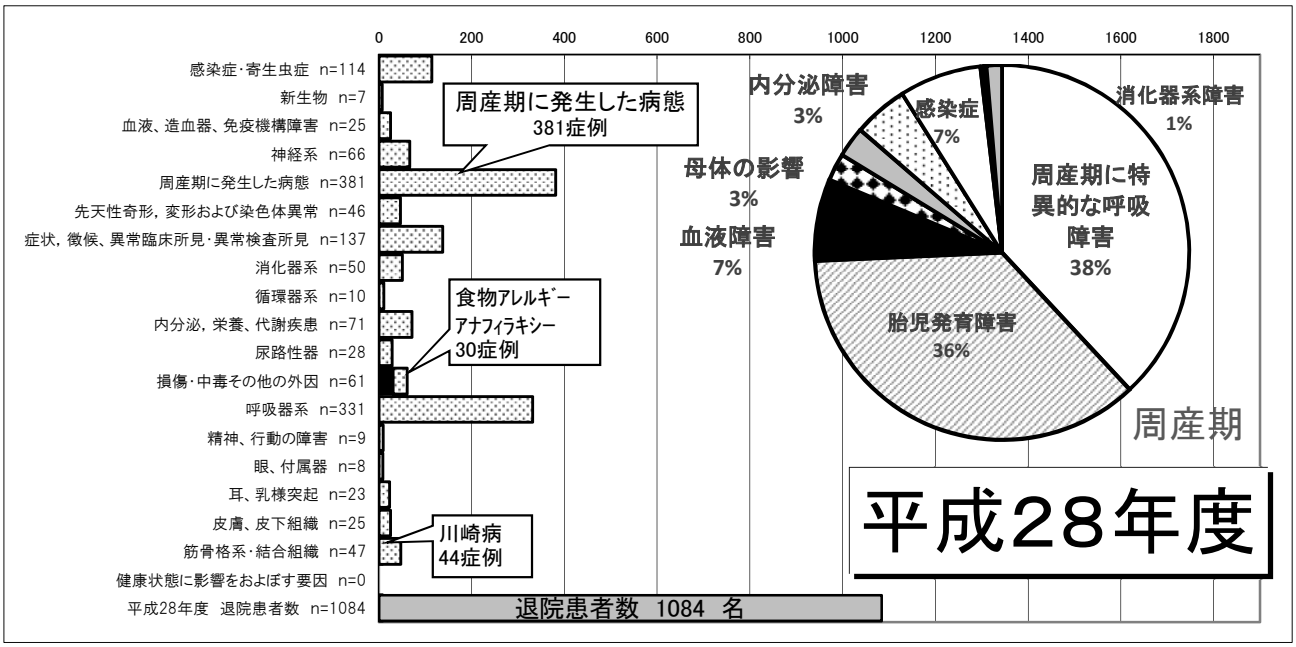
平成28年９月より始まった診療参加型臨床実習として東京慈恵会医科大学５～６年生の受け入れを行っており、４週間毎１名ずつ配属されている。

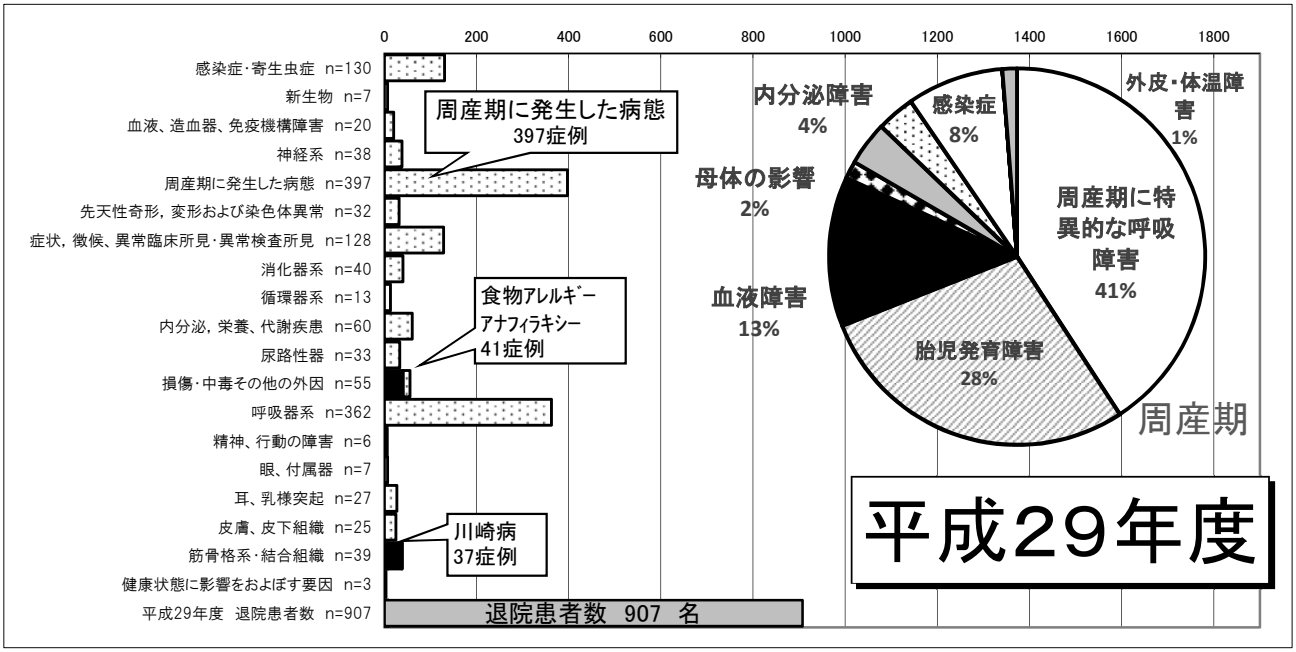
週１回の重症患者への対応シミュレーション、病棟での勉強会を頻回に行うとともに、学会発表や論文投稿など、医療全体への貢献も積極的に行っている。

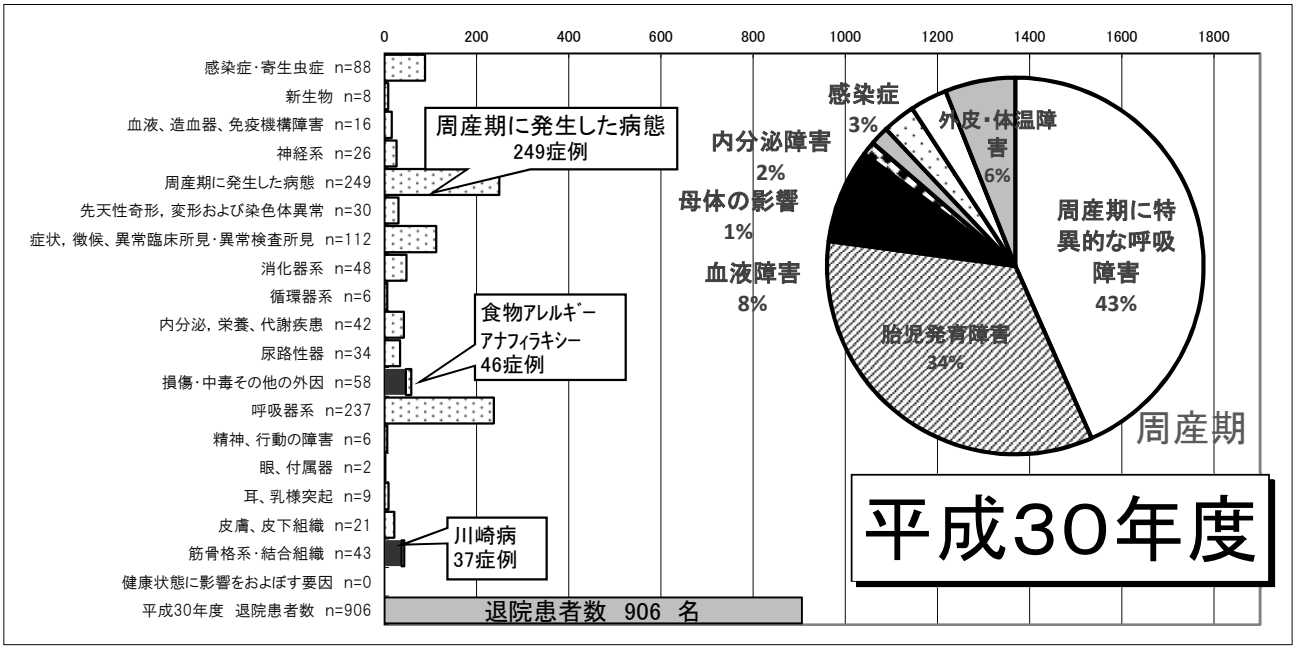
3　来年度の課題

地域医療機関、静岡県立こども病院と密に連携をとり、プライマリ・ケアから専門的医療まで包括的で質の高い小児医療を提供することを引き続き目指していきたい。

（文責　秋山　直枝）


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=114
新生物 n=7
血液、造血器、免疫機構障害 n=25
神経系 n=66
周産期に発生した病態 n=381
先天性奇形，変形および染色体異常 n=46
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=137
消化器系 n=50
循環器系 n=10
内分泌，栄養、代謝疾患 n=71
尿路性器 n=28
損傷・中毒その他の外因 n=61
呼吸器系 n=331
精神、行動の障害 n=9
眼、付属器 n=8
耳、乳様突起 n=23
皮膚、皮下組織 n=25
筋骨格系・結合組織 n=47
健康状態に影響をおよぼす要因 n=0
平成28年度 退院患者数 n=1084
周産期に発生した病態
381症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
30症例
川崎病
44症例
退院患者数 1084 名
内分泌障害
3%
感染症
7%
消化器系障害
1%
母体の影響
3%
血液障害
7%
周産期に特
異的な呼吸
障害
38%
胎児発育障害
36%
周産期
平成28年度


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=130
新生物 n=7
血液、造血器、免疫機構障害 n=20
神経系 n=38
周産期に発生した病態 n=397
先天性奇形，変形および染色体異常 n=32
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=128
消化器系 n=40
循環器系 n=13
内分泌，栄養、代謝疾患 n=60
尿路性器 n=33
損傷・中毒その他の外因 n=55
呼吸器系 n=362
精神、行動の障害 n=6
眼、付属器 n=7
耳、乳様突起 n=27
皮膚、皮下組織 n=25
筋骨格系・結合組織 n=39
健康状態に影響をおよぼす要因 n=3
平成29年度 退院患者数 n=907
周産期に発生した病態
397症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
41症例
川崎病
37症例
退院患者数 907 名
内分泌障害
4%
感染症
8%
外皮・体温障
害
1%
母体の影響
2%
血液障害
13%
周産期に特
異的な呼吸
障害
41%
胎児発育障害
28%
周産期
平成29年度


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=88
新生物 n=8
血液、造血器、免疫機構障害 n=16
神経系 n=26
周産期に発生した病態 n=249
先天性奇形，変形および染色体異常 n=30
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=112
消化器系 n=48
循環器系 n=6
内分泌，栄養、代謝疾患 n=42
尿路性器 n=34
損傷・中毒その他の外因 n=58
呼吸器系 n=237
精神、行動の障害 n=6
眼、付属器 n=2
耳、乳様突起 n=9
皮膚、皮下組織 n=21
筋骨格系・結合組織 n=43
健康状態に影響をおよぼす要因 n=0
平成30年度 退院患者数 n=906
周産期に発生した病態
249症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
46症例
川崎病
37症例
退院患者数 906 名
感染症
3%
外皮・体温障
害
6%
内分泌障害
2%
母体の影響
1%
血液障害
8%
周産期に特
異的な呼吸
障害
43%
胎児発育障害
34%
周産期
平成30年度

■外科

1　外科スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
院長	柏木　秀幸	部長	梶本　徹也
副部長	坪井　一人　（～12 月）	副部長	鈴木　俊雅（１月～）
副部長	吉田　清哉	副部長	良元　和久
副部長	道躰　隆行	医長	鈴木　俊亮(～12 月)
医長	入村　雄也（１月～）	医長	髙野　裕樹
医員	市原　恒平(～12 月)	医員	吉岡　聡（１月～）
専任医師	後藤　圭佑	専任医師	阿部　正

2　平成 30 年度の診療実績

食道良性手術（アカラシアや逆流性食道炎など）８件、食道がん手術２件、スリーブ状胃切除術（減量手術）42件、胃・十二指腸良性手術14件、胃がん手術30件、小腸手術（腸閉塞や悪性疾患など）51件、虫垂切除術56件、大腸手術150件、肛門手術（痔疾患など）８件 、そけい・腹壁ヘルニア手術112件、胆嚢・胆管結石手術130件、肝臓・胆道がん手術21件、膵がん手術17件、乳がん手術49件、呼吸器手術26件、小児外科手術28件

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
上部消化管	99	106	106
下部消化管	262	220	265
肝胆膵	116	160	157
ヘルニア	110	98	112
呼吸器	14	14	26
乳腺	55	55	51
小児外科	0	1	28
手術総数(鏡視下手術)	796(284)	831(303)	914(342)

８月18日に「ブラック･ジャック　セミナー」を開催した。本セミナーは、外科を中心にジョンソン･エンド･ジョンソン株式会社と共催で行っている事業で、市内の中学生を対象に、実際の医療用資機材を用いた手術の模擬体験を通じ、医師の仕事に触れ医学の道を志すきっかけになることを期待して、平成25年度から毎年開催している。本年度は32名の中学生が参加した。

3　来年度の課題

当院は地域がん診療病院であり、外科ではがん診療に重点を置いた診療を行っている。診断や手術だけではなく、化学療法、緩和医療（緩和ケア）にも重点を置いている。診療の主体となる消化器疾患に関して、消化器内科との定期的カンファレンス（cancer board）を行っており、今後は他科や他職種を交えたcancer boardの開催を検討している。

外科手術は、順調に増加している。2017 年９月から非常勤講師による小児外科外来を開設、2018 年からは小児外科手術を積極的に開始し今後も増加が見込まれる。呼吸器外科外来診療も昨年度から毎週行っており、呼吸器外科手術の増加も期待される。当院では高リスク患者の手術が多いが、より安全な外科治療を提供したい。

（文責　梶本　徹也）

■整形外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	永井　素大（～３月）	部長	加藤　努
副部長	三槇　真（４月～）	医長	村上　宏史（～６月）
医長	原田　直毅（７月～）	専任医師	閨谷　大希（～６月）
専任医師	宮坂　玄樹（～６月）	専任医師	井ノ上　裕彬（7月~12月）
専任医師	笹本　翔平（７月～12 月）	専任医師	木原　匠（１月～）
専任医師	宮嶋　寛武（１月～）		

2　平成 30 年度の診療実績

静岡県東部地域の二次救急病院として、多くの外傷患者の診療・治療を行っている。転倒などによる骨折外傷だけでなく、労災や交通外傷での多発性外傷の対応をすることが多く、30 年度は複合損傷が多い印象があった。また例年通りに、高齢者の大腿骨頚部・転子部骨折も多く、合併症を持つ患者への対応が多くみられた。年間手術件数は約 600 件であるが、変形性関節症に対する人工関節手術は年間約 50 件であり、骨切手術や骨バンクを用いた高難度の再置換手術も多く行われていた。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
人工関節置換術	50	63	44
大腿骨近位部骨折 （骨接合術・人工骨頭置換術）	223	224	213
その他	314	248	331
合計手術件数	587	535	588

3　来年度の課題

近年の傾向として高齢者・多合併症・要退院支援の患者が増えており手術前後の評価を十分に行い、安全な治療を行うことを心がけたい。コ・メディカルとの協力しながら術後の支援を強力に行う必要があり、病床利用数の健全化に努めたい。来年度には、乳児股関節検診においてエコー検診の導入のほか、高齢者の骨粗鬆症において骨粗鬆症リエゾンサービスの導入を検討している。富士地区ではなく静岡県東部地区の基幹病院としてふさわしい質の高い医療を提供できるよう、努力してきたい。

（文責　加藤　努）

■形成外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
医長	西村　礼司	専任医師	藤田　吉彦
専任医師	平山　晴之（～９月）	専任医師	坂井　玲織（10 月～）

2　平成 30 年度の診察実績

平成 30 年度の診療実績は下記のとおりである。（参考：平成 28・29 年度併記）

	入院手術			外来手術			合　計		
	H28	H29	H30	H28	H29	H30	H28	H29	H30
外傷	84	128	218	137	132	245	221	260	463
先天異常	11	13	9	4	4	3	15	17	12
腫瘍	65	55	63	241	200	170	306	255	233
瘢痕、ケロイド	4	5	2	21	5	3	25	10	5
難治性潰瘍	5	4	1	0	0	2	5	4	3
炎症、変性疾患	24	14	15	92	73	92	116	87	107
計	193	219	308	495	414	515	688	633	823

3　来年度の課題

（1）平成 31 年４月より、スタッフ１名が減員され２名体制の診療に戻ることとなった。医療安全に最大限注意しつつ、少ない人員でもできる範囲で幅広く対応していけるよう工夫していく。

（2）手外科中心の診療体制を継続しつつ、その他の分野の症例も少しずつ増やしていけるように取り組んでいきたいと考えている。

（文責　山田　啓太）

■脳神経外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	諸岡　暁	副部長	野田　靖人
医員	廣津　竜也	専任医師	藤田　周佑

2　平成 30 年度の診療実績

入院疾患の割合および手術数は表のとおり。

（１）入院疾患別割合(%)

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
くも膜下出血	7	4	7
脳出血	19	17	13
脳梗塞	17	16	9
頭部外傷	38	39	38
腫瘍	5	7	6
脊椎	3	2	2
血管内治療関連	5	7	12
その他	6	8	14

（２）手術件数

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
頭部手術	151	167	183
①開頭手術	37	68	61
②神経内視鏡手術	2	7	4
③脳血管内手術	25	26	25
脊椎手術	9	15	3

・疾患別入院数割合はほぼ前年度同様。
・脳卒中地域連携パスによりリハビリテーション転院は順調である。
・脳腫瘍の紹介症例および手術が増えた。悪性腫瘍の化学療法症例が続いている。
・手術総数は今年度もさらに増加傾向。開頭手術が増えている。
・脳血管内治療数は横這いだが、紹介症例数は維持できて、治療のための検査などの入院が増えている。

3　来年度の課題

・手術数は引き続き 200 件超を目標とする。

・DPC 期間を意識した入院日数とする。

・紹介患者数の維持･拡大。

・血管内治療専門医および脊椎手術専門医の常勤を大学教室へ要請していく。

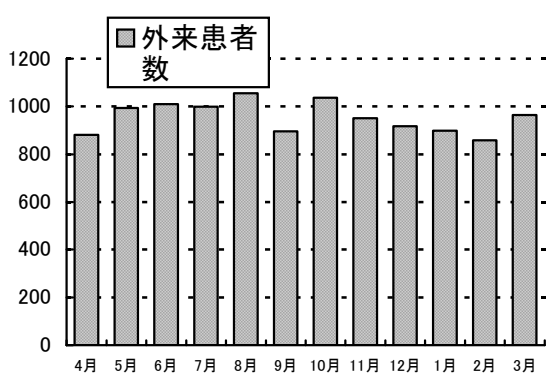
（文責　諸岡　暁）

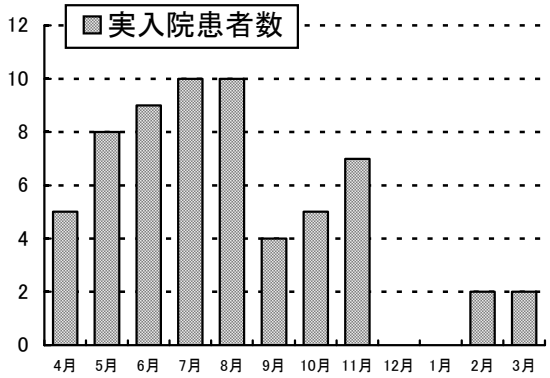
■皮膚科

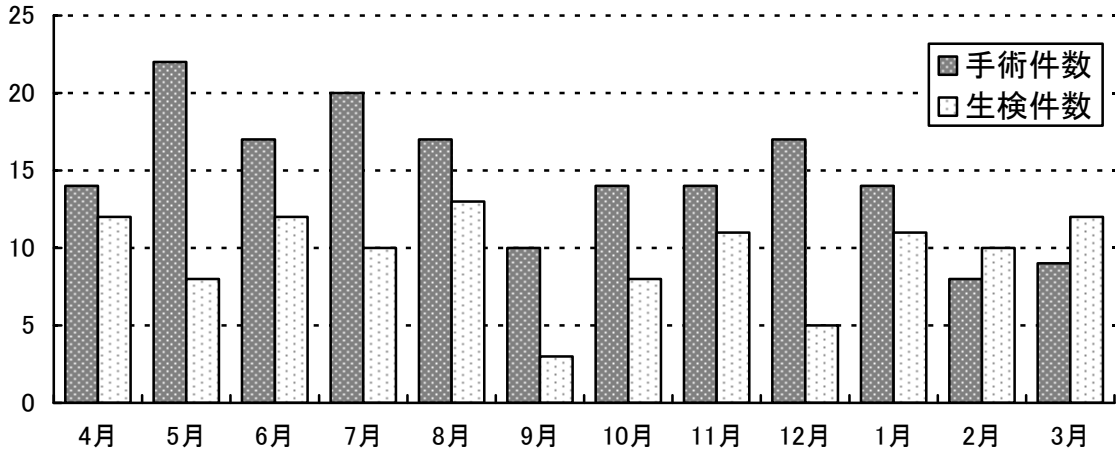
1　スタッフ

役　職	氏　名	役　職	氏　名
部　長	津嶋　友央	医　員	森下　ナオミ

2　平成 30 年度の診療（業務）実績







	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
外来患者数（人）	12,127	11,891	11,462
実入院患者数（人）	30	47	62
手術件数（件）	252	219	176
皮膚生検件数（件）	134	154	115

3　来年度の課題

入院適応のある症例は、患者の症状にあわせて入院治療をすすめ、より質の高い医療を提供する。　（文責　津嶋　友央）

■泌尿器科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	後藤　博一	副部長	鈴木　英訓
副部長	下村　達也	専任医師	阪中　啓吾（～６月）
専任医師	宮島　慶一郎（７月～）	専任医師	笹原　太志郎（10 月～）

2　平成 30 年度の診療（業務）実績

平成 30 年度は９月まで常勤医４名と非常勤２名で診療を行った。10 月からは常勤医師が１名増員となり、常勤医５名体制で診療を行っている。悪性疾患、尿路結石、尿路感染症など泌尿器科領域全般の疾患に対し、初期治療から緩和医療、終末期治療まで一貫した診療を行い、富士宮市を含む富士医療圏で入院診療・手術が可能な泌尿器科として、中心的存在として診療を行っている。診療は一次、二次だけでなく、場合によって三次診療まで行っている。平成 28 年度から開始した腹腔鏡手術の件数も順調に増加し、今年度は腹腔鏡下腎・尿管悪性腫瘍手術を 36 例問題なく施行した。全体の手術症例数も、手術枠の追加に伴い増加している。進行性の尿路上皮癌や去勢抵抗性前立腺癌に対しては、通院化学療法や新規治療薬を積極的に導入し治療を行っている。また、ESWL も今年度新機種に更新し、通院結石破砕治療を継続して行っている。泌尿器科女性専門外来も、非常勤の女性医師が引き続き担当し、順調に診療が行われた。

主な手術の年次推移

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
経尿道的前立腺切除術	32	43	45
経尿道的膀胱腫瘍切除術	149	202	241
腎・尿管悪性腫瘍手術	26	34	36
膀胱全摘術	4	10	10
前立腺全摘術	3	10	15
体外衝撃波結石破砕術	536	546	527
年間手術件数（ESWL 除く）	317	416	489

3　来年度の課題

連日２診を利用し外来診療での患者待ち時間の改善を図るとともに、通院化学療法を今以上積極的に取り入れたり、超音波診断装置の増設などにより、診療単価増

加を図りたい。手術においても症例数の増加を図り、前立腺全摘術は腹腔鏡下手術も導入する予定である。来年度も医療機器や診療システム、地域連携の更なる充実を図り、特に結石治療は経尿道的手術装置を充実させ、一貫した治療を行いたいと考えている。

（文責　後藤　博一）

■産婦人科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副院長	鈴木　康之	部長	土井　貴之（～12 月）
医長	長谷川　瑛（～９月）	医長	矢田　大輔
医長	小田　彩子	医員	榛葉　頼子
専任医師	佐藤　あずさ		

2　平成 30 年度の診療実績

当科は地域周産期母子センターとして、ハイリスク分娩や地域からの母体搬送の受け入れを行っている。分娩件数は減少傾向にあるが、ハイリスク症例や母体搬送に関しては横ばいである。

婦人科疾患では、良性手術における腹腔鏡手術件数が年々、増加している。これは技術向上による適応拡大に起因することが大きいと考える。

悪性腫瘍手術は、近隣に静岡県立がんセンターがあるが、患者さんの希望があれば当院で手術を施行している。それに応えるべく、病気だけでなく、患者さんの背景や社会環境を鑑みた医療を提供できるよう努力している。

生殖医療は近年一定数の件数を維持している。

主な診療実績

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
分娩件数	679	554	588
母体搬送受入数	89	63	86
帝王切開件数	169	129	135
ハイリスク分娩（保険算定件数）	133	123	121
内視鏡下（腹腔鏡下および子宮鏡下）手術数	193	220	184
良性疾患（開腹及び膣式）手術数	152	188	230
悪性腫瘍手術数	23	27	23
総手術数	537	564	535

生殖補助医療

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
人工授精件数	102	92	98
体外受精件数	98	107	80
融解胚移植件数	160	172	143

3　来年度の課題

平成 30 年４月時点で常勤医が７名、うち産婦人科専門医が５名であったが、令和元年度は常勤医６名、うち産婦人科専門医３名と減少する。富士市は県内３番目の人口を誇るが総合病院は当院しかなく、症例数も多い。まずは安定した医療を供給するために常勤医の増員を目指したい。

来年度も引き続き地域周産期母子センターとして、ハイリスク症例や母体搬送もしくは急変した妊婦が、安心してお産ができるように周産期チームとして、小児科医師、看護師、その他のスタッフとの連携を大事にしていく。

婦人科手術は内視鏡手術が増加している。今後も合併症のない安全な医療を提供できるように研鑽を積む。また学会活動に積極的に参加して最新の知見を吸収し、実臨床に還元できるよう邁進する。

（文責　矢田　大輔）

■眼科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	藤谷　暢子	医長	渡辺　勝

2　平成 30 年度の診療実績

外来診療は、眼科医２名、視能訓練士３名、看護師２名、医療補助１名、受付１名で行った。

基本的に、月・火・水・金曜日は２診、木曜日は１診（第４木曜日のみ２診）であった。

午前中は、紹介予約枠を使った紹介初診を最優先とし、９時から予約診察を行っている。予約外や初診も 11 時までの受付で診察可能である。午後は完全予約検査であり、視野検査、眼位検査、レーザー、蛍光眼底撮影、抗 VEGF 薬硝子体注射、ボツリヌス毒素製剤注射、涙点プラグ・鼻涙管シリコンチューブ挿入・霰粒腫・治療的表層角膜切除等の外来小手術、小児の弱視・斜視外来を行っている。

ブドウ膜炎に対する自己注射の指導や、通常以上に点眼処方を希望される患者さんに、看護師が点眼指導も行う等、きめ細かい対応を行っている。

平成 24 年から開始したロービジョン外来も、続けている。月１回予約制で、補助具を合わせ、日常生活のアドバイスを行っている。タブレットによるロービジョンケアも取り入れており、他院からのロービジョン外来のご紹介にも対応している。

また、平成 26 年から始めたオルソケラトロジーも行っている。まだ処方数は少ないが、病院ウェブサイトを見て、遠方から受診して頂く事もあり、今後も継続していく。

山梨大学眼科より飯島裕幸教授にお越し頂く教授外来も継続している。今後も、２ヶ月に１回難症例を診て頂くことは、患者さんのためだけでなく、我々の診療技術の向上にもなると考えている。

中央手術室での手術は、月曜午後と火曜午後に行っている。白内障を中心に、緑内障、網膜剥離、翼状片、斜視、眼瞼内反症などを行っている。

白内障手術は、片眼２泊３日入院と日帰り手術を選択して頂いている。様々な理由で入院することが難しい患者さんのニーズに応えたもので、徐々に日帰り手術件数が増え、結果的に手術総件数が増加している。認知症や精神発達遅滞等のために全身麻酔で行う症例も受け入れており、３泊４日入院で治療を行っている。

硝子体手術については、月１回、山梨大学から専門医を招き、少数ながら万全の体制で行っている。

中央手術室での眼科手術

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
白内障手術	232	253	239
緑内障手術	12	23	25
硝子体手術	16	22	20
網膜剥離手術	2	2	0
強角膜縫合術	0	0	2
翼状片手術	5	1	2
斜視手術	1	4	0
眼瞼内反症手術	4	2	10
その他	2	2	1
計	274	309	299

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
抗 VEGF 硝子体注射	173	200	215

3　来年度の課題

手術件数については、近隣に手術を行う眼科クリニックが多いこと、当科で行うものは全身状態が悪く、目も難症例の比率が高いことから、限られた時間枠で手術件数を大幅に増やすことは難しいが、昨年度より手術症例の増加を目指す。

緑内障手術については、近年 MIGS という新しい術式が広まりつつあり、当科でもスーチャーロトミーや眼内法の線維柱帯切開術、iStent 等を導入し、結果として緑内障手術件数が増えてきている。

当科の位置付けとしては、他院・他科との連携である。開業医の先生方との連携をより密にするよう工夫したい。他科とも積極的にコミュニケーションを取り、多方向からの加療を目指す。

また、ロービジョンケアは、患者さんが諦める前の働きかけが大事である。早期から患者さんのニーズを掘り起こし、残された機能を最大限使えるよう補助していきたい。

オルソケラトロジーも症例数増加を目指している。また、多焦点眼内レンズといった過去に行ってこなかった治療も今後行うべく、現在環境を整備している。

（文責　藤谷　暢子）

■耳鼻咽喉科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	重田　泰史	医長	高津　南美子
医員	黒田　健斗（～９月）	医員	児玉　浩希（10 月～）

2　平成 30 年度の診療実績

耳鼻咽喉科は３人体制で診療をし、耳、鼻、咽喉頭、頸部の診断・治療を幅広く行っている。午前中は一般外来を行い、特別な治療や処置が必要となる患者様は午後に来ていただき治療、処置を行っている。手術日は火・金の週２日間で、高度な技術を必要とする手術は東京慈恵会医科大学の医師を招聘し行っている。進行癌症例は静岡県立静岡がんセンターと連携している。また当科の特色として嚥下障害患者に対する診断・治療を積極的に行い、院内の絶食患者のより安全な経口摂取の再開を目指している。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
嚥下機能評価患者	107	52	39
内視鏡下鼻内副鼻腔手術	116	110	105
鼻中隔矯正術	76	47	47
口蓋扁桃摘出術	136	65	66

3　来年度の課題

得意分野である内視鏡下鼻内副鼻腔手術を柱として、手術症例数を増やすことができるよう努力したいと考えている。

耳鼻咽喉科での嚥下機能評価患者は減少しているが、ST も含めた嚥下機能評価患者は増加しており、院内全体としての嚥下機能評価患者数は増加している。引き続き ST と連携して嚥下機能評価を行っていきたい。

（文責　重田　泰史）

■放射線科

1　スタッフ

役　職	氏　　名		
医長	道本　顕吉		

2　平成 30 年度の診療実績

昨年度より引き続き、CT、MRI、RI、超音波に関して可及的迅速に全件読影を行っており、これらの検査件数は概ね右肩上がりの状況が続いているが、画像診断管理加算２（CT/MR/RI の８割以上の読影結果が、常勤専門医により撮影日の翌診療日までに主治医に報告される事を条件に、１件ごとに 180 点算定される）の算定施設基準を維持することができた。IVR に関しても幅広い処置を施行しており、運動器の慢性疼痛のカテーテル治療の開始、子宮筋腫のカテーテル治療の開始準備など、更なる拡充を目指している。

IVR 部門

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
合計	158	190	190
Vascular IVR	115	119	122
肝癌の化学塞栓・動注療法（TACE/TAI）	36	39	31
胃静脈瘤の塞栓（BRTO/PTO）	1	2	3
喀血に対する気管支動脈塞栓（BAE）	6	6	6
透析シャントの血管形成術（PTA）	2	7	15
静脈サンプリング（副腎、膵臓、下垂体など）	5	1	1
PICC Line 挿入	22	26	22
関節疼痛に対する IVR	－	－	4
緊急止血術	24	25	20
動脈瘤、血管奇形、その他	19	13	20
Non-vascular IVR	43	71	68
経皮的生検	0	25	22
膿瘍に対する経皮的ドレナージ	25	30	25
胆道系	7	6	8
血管腫に対する硬化療法	9	6	9
その他	2	4	4

読影部門

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
総読影件数	34,817	35,639	35,496
CT	20,683	21,493	21,924
MRI	5,563	5,824	5,683
US	7,594	7,407	7,019
アイソトープ	977	915	870

病診連携件数

	平成 28 度	平成 29 年度	平成 30 年度
高度医療機器利用依頼	1,839	1,863	1,871

放射線治療人数

	平成 28 年度	平成 28 年度	平成 30 年度
患者数	145	145	159
頭頸部	9	5	6
胸部	65	61	57
腹部	12	10	5
骨盤	26	29	47
骨軟部	25	41	44

３　来年度の課題

・他科との連携をさらに密にしていく。

・IVR 業務の拡充

・画像診断管理加算２の算定施設基準を維持する。

・病診連携（高度医療機器利用依頼）にさらに力を入れ、逆紹介率向上に貢献する。

（文責　道本　顕吉）

■麻酔科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	井上　恒佳	副部長	大谷　法理
医長	影山　佳世		

2　平成 30 年度の診療実績

過去３年間の麻酔科管理手術症例の推移は下表のとおりである。

平成 29 年度より現スタッフによる新体制での麻酔科管理を行っている。本年度も前年度と同程度の麻酔科管理症例数、全身麻酔件数を維持することができた。

また手術管理課の協力のもと、手術室運営についても積極的に介入した。より効率的な手術室運営を行った結果、緊急手術を日中の時間帯に入室できるようになり、手術室入室までの時間の短縮に成功した。

その他に特記すべきこととして、平成 30 年４月より本格的に小児外科手術が開始された。それに伴い小児患者の麻酔件数も前年度に比して大幅な増加となった（６歳以下の患者の手術件数：H29　56 件 → H30　76 件)。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
麻酔科管理症例数	1,542	1,708	1,733
全身麻酔 (他の麻酔方法の併用を含む)	1,499	1,670	1,701
硬膜外麻酔・脊椎くも膜下麻酔 (どちらか一方・両者併用を含む)	29	26	26
その他	14	12	6

3　来年度の課題

麻酔科管理症例数および全身麻酔症例数については、現体制での人員では、物理的な限界もみえつつある。今年度についても同程度の症例数を目標とする。

今年度は、一昨年度からの課題でもあった麻酔の質の向上について重点的に取り組む予定である。積極的な合併症対策などを前年度から行った結果、まずまずの効果はみられてきている。こちらも引き続き継続していく。

また働き方改革などが叫ばれている現在の情勢では、麻酔科医の勤務時間についてもいずれ見直す必要が出てくるものと考える。麻酔科の業務は他科と共同で行われるため麻酔科単独での実施は困難だが、まずは定時手術の時間内終了について、手術管理課とともに、他科への協力を求めていきたい。

（文責　井上　恒佳）

■病理診断科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	遠藤　泰彦		

2　平成 30 年度の診療実績

病理組織診断	5,024 件
（内、術中迅速診断）	158 件
細胞診断	5,154 件
病理解剖	9 件
CPC 開催	年６回
各診療科とのカンファレンス	多数

常勤医師１名、非常勤医師１名、臨床検査技師・細胞検査士６名、医師事務作業補助者１名を含めた構成で業務を行っており、場合によっては東京慈恵会医科大学との連携のもと診断を行うこともある。過去３年の実績をご覧頂くとわかるが診断件数は年々明らかに増加してきており、また免疫染色の件数に関しても明らかな増加が認められる。

※ 過去３年間の診断件数

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
組織診断 （内、術中迅速診断）	5,116 (138)	5,209 (156)	5,024 (158)
細胞診断	4,709	4,840	5,154
病理解剖	6	9	9

3　来年度の課題

病理診断は非常に重要な検査であり、特に腫瘍で陽性・悪性を決める場合には最終診断となる。このことは、治療方針の決定、治療効果の評価、および予後判定に重要な意味を持っている。病理医は、常に患者さんとともに病気と健康について考え、最善の医療が提供できるよう心がけている。

（文責　遠藤　泰彦）

■歯科口腔外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	勝山　直彦	副部長	井出　正俊
医員	久我　憲央		

2　平成 30 年度の診療実績

地域基幹病院の口腔外科として主に難抜歯、外傷、炎症、腫瘍、嚢胞、粘膜疾患、奇形・変形の手術を行っている。当科は、一般開業医では処置困難な症例を扱い、通常の歯科治療は行っていない。

平成 30 年度外来局所麻酔手術は、2,472 例であった。

全身麻酔または静脈麻酔の症例は、難抜歯が最も多く、ついで嚢胞、外傷の順である。

手術症例

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
難抜歯	1,619	1,895	1,903
嚢胞	88	106	79
外傷	14	21	17
その他	211	399	473
計	1,932	2,421	2,472

3　来年度の課題

今後、地域基幹病院の口腔外科として地域医療機関と密な連携をはかり手術症例を増やしたいと考えている。昨年と同様に、顎変形症について県東部の歯科矯正医と連携し症例を増やす予定である。また、周術期口腔機能管理を本格的に開始した。今後各科と連携し充実させていく予定である。

当院は、富士市で唯一の基幹病院であるため富士市民のために質の高い医療を提供できるよう研鑽・努力していきたい。

（文責　勝山　直彦）

■手術管理科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	良元　和久		

2　平成 30 年度の診療実績

手術室の安全性や効率性の向上を目指し、手術室全体の運用や診療部の調整、緊急時の対応ができる管理体制を構築した。

・手術件数等は手術室運営委員会の「平成 30 年度の取組実績」を参照。
・特殊カンファレンスを行い、安全な手術運営を行った。

特殊カンファレンス開催件数

平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
3	9	3

3　来年度の課題

・他診療部、手術室スタッフと協力し、さらなる手術室の効率な運用を目指す。
・手術医療機器の更新等の見直しを行い、適正な機器の選定、管理を行う。
・手術枠を有効に使用するためにアンケートを行い、定期的に見直す。

（文責　良元　和久）

■非常勤医師

（平成 30 年４月１日現在）

所　属	氏　　名	所　属	氏　　名
糖尿病･内分泌･血液内科	谷口　幹太	糖尿病･内分泌･血液内科	比企　能人
糖尿病･内分泌･血液内科	石澤　将	消化器内科	中野　真範
内科（内視鏡）	内山　勇二郎	内科（内視鏡）	加藤　正之
内科（内視鏡）	鳥巣　勇一	内科（膠原病）	野田　健太郎
精神神経科	品川　俊一郎	精神神経科	三宮　正久
循環器内科	谷川　真一	心臓血管外科	橋本　和弘
心臓血管外科	川村　廉	心臓血管外科	木南　寛造
外科（内視鏡）	宮川　朗	外科（内視鏡）	増田　勝紀
外科（呼吸器）	森川　利昭	外科（女性外来）	神尾　麻紀子
小児科（小児精神）	服部　浩平	小児科（小児発達）	安田　寛二
脳神経外科	坂本　広喜	リハビリテーション科	佐々木　信幸
脳神経外科	武井　淳	脳神経外科	秋山　雅彦
泌尿器科	平本　有希子	泌尿器科	阿部　和弘
産婦人科	廣中　由紀	産婦人科	金山　尚裕
放射線科	竹永　晋介	放射線科	大木　一剛
放射線科	和田　紘幸	放射線科	松井　洋
放射線科	成田　賢一	放射線科	榎　啓太朗
放射線科	樋口　陽大	放射線科	五味　拓
放射線科	白石　めぐみ	放射線科	加納　瑠為
放射線科	青木　真一	放射線科	小宮山　貴史
麻酔科	渡邉　薫	麻酔科	金子　貴久
麻酔科	亀田　慎也	麻酔科	八木　俊
麻酔科	越後　憲之	麻酔科	青木　友里
麻酔科	大谷　さゆみ	麻酔科	押田　一真
麻酔科	田島　果林	麻酔科	木村　綾乃
麻酔科	酒巻　大輔	麻酔科	佐野　友里
麻酔科	澁谷　有香	麻酔科	清水　啓介
麻酔科	生天目　磨依	麻酔科	成井　尭史
麻酔科	吉村　三恵	病理診断科	千葉　諭
歯科口腔外科	阿部　恵一	歯科口腔外科	岡山　浩美
歯科口腔外科	森永　桂輔	歯科口腔外科	岡村　尚
歯科口腔外科	砂田　勝久	歯科口腔外科	小林　清佳
歯科口腔外科	猪股　徹	歯科口腔外科	義隆　伸之
歯科口腔外科	吉田　和正	歯科口腔外科	武田　宗矩

■臨床研修医

氏　　名	採　用　期　間
大原　祐生	平成 29 年４月１日～平成 31 年３月 31 日
吉田　和博	平成 29 年４月１日～平成 31 年３月 31 日
塩田　悠乃	平成 30 年４月１日～令和２年３月 31 日
白川　毅	平成 30 年４月１日～令和２年３月 31 日
萩原　亘	平成 30 年４月１日～令和２年３月 31 日
山崎　慎太郎	平成 30 年４月１日～令和２年３月 31 日
遠山　皓基	平成 30 年８月１日～平成 30 年 11 月 30 日

■臨床検査科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技師長	石川　隆之	副技師長	鈴木　雅人
副技師長	鈴木　英昭	参事補兼主任	渡邉　修
参事補兼主任	渡邉　由喜子	参事補兼主任	小野　美代子
参事補兼主任	岩崎　佐知子	主任	大芝　孝次
主任	長峰　誠一郎	主任	渡邉　広明
主任	佐野　僚子	主査	野田　文子
主査	遠藤　聡	主査	石井　孝良
主査	山本　純子	上席技師	大野　真一
上席技師	手老　真弓	上席技師	阿部　愛
上席技師	尾形　裕以	上席技師	清　亜矢
技師	内野　有子	技師	竹下　翔太
技師	池田　琢	技師	後藤　理紗
技師	外山　卓矢	技師	柏木　里沙子
技師	大野　成美	技師	森田　合莉
臨時職員	加藤　才子	臨時職員	加藤　加代子
臨時職員	左原　泰子	臨時職員	後藤　隆広
臨時職員	宇佐美　由紀子	臨時職員	塩田　幸子
臨時職員	中山　智美	臨時職員	栗原　有紀子
医療補助員	芹澤　好子	BML 事務員	原　久美

2　平成 30 年度の業務実績

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
生化学検査	2,106,397	2,099,585	2,093,816
血液検査	327,072	326,978	318,934
一般検査	87,300	83,509	83,449
輸血検査	26,507	29,282	32,506
生理検査	34,357	34,709	33,407
病理検査	10,644	10,938	11,314
細菌検査	43,566	40,396	41,667
採血患者数	69,491	68,528	68,464
剖検数	6	15	9

・病院機能評価にて輸血管理機能Ｓ評価、病理診断機能Ａ評価、臨床検査機能Ａ評価を頂き、臨床検査が適切に行われていることが確認された。
・厚生労働省関係省令の臨床検査室整備に関する医療法改正に伴い、検体検査精度確保に係わる標準作業書、作業日誌、台帳の整備を行った。
・病理検査部門でのホルマリンの保管、記録、管理の適正化を行い、毒物劇物取締法、労働安全衛生法の遵守に取組んだ。
・検査データの質的向上に取組み、臨床検査技師会精度保証施設の認定を更新した。
・日本医師会、静岡県医師会、日本臨床検査技師会主催の精度管理調査に参加した。
・血中 PIVKAⅡはルミパルス G1200（化学発光酵素免疫法）で院内測定を開始した。
・血中 KL-6 は生化学自動分析装置 TBA2000FR(ラテックス凝集反応)に変更した。
・血糖測定装置を ADAMS Glucose GA-1172 に更新し運用を開始した。
・グリコヘモグロビン測定装置を ADAMS A1c HA-8190V に更新し２台体制での運用を開始した。

＜各種認定等資格取得者状況＞

名称	人数	名称	人数	名称	人数
細胞検査士	６名	認定輸血検査技師	１名	認定血液検査技師	４名
認定一般検査技師	１名	認定超音波検査士	５名	生殖補助医療胚培養士	３名
体外受精コーディネーター	１名	日本糖尿病療養指導士	４名	心臓リハビリテーション指導士	１名
緊急臨床検査士	４名	健康食品管理士	１名	未病専門指導師	１名
認定心電検査技師	１名	栄養サポートチーム療法士	１名	認定病理検査技師	２名

＊平成 30 年度新たに認定血液検査技師１名、緊急臨床検査士１名、糖尿病療養指導士１名が取得した。

３　来年度の課題

・業務や人員配置の見直しを行うと共に、認定専門資格取得に向けて挑戦できるような職場環境作りを心掛け人材育成を目指す。
・入職３年以内の新人教育に重点を置き、検査技術のスキル向上と育成に取り組む。
・診療部、看護部、診療技術部との密な連携を図り、様々な要望や意見、課題に応えながらチーム医療に貢献し、新規検査項目の導入を検討していく。
・迅速で正確な検査結果の報告が行えるよう、精度管理の向上とシステム・分析装置の整備に努め、信頼される検査データの提供に努める。

（文責　石川　隆之）

■中央放射線科

1　スタッフ

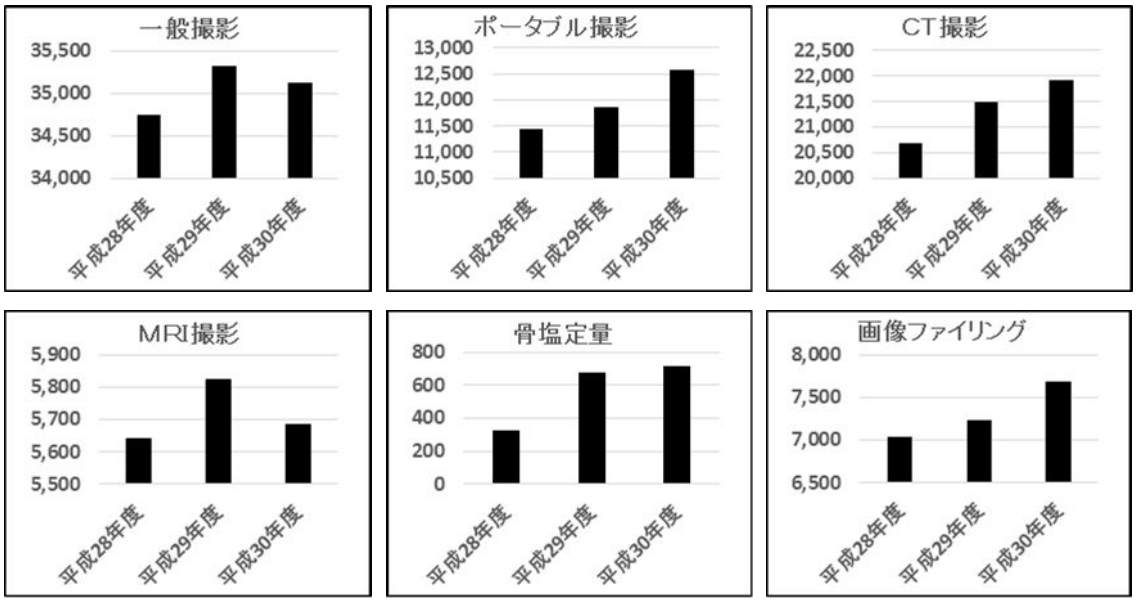
役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技術部長	井出　宣孝	技師長	髙木　省一
副技師長	清水　則雄	副技師長	遠藤　佳秀
参事補兼主任	遠藤　一弘	参事補兼主任	杉山　伸一
参事補兼主任	菅原　和仁	主任	池谷　幸一
主任	鈴木　和訓	主任	稲垣　伸一
主任	鍋島　雄和	主査	井出　敦之
主査	酒井　理香	主査	澤口　信孝
主査	大森　知恵	主査	岡田　和教
主査	猪股　崇亨	主査	鈴木　浩之
上席診療放射線技師	秋田　真弓	上席診療放射線技師	太田原　絢子
上席診療放射線技師	岡根谷　侑	診療放射線技師	神田　直樹
診療放射線技師	増田　裕司	診療放射線技師	湯山　桃子
診療放射線技師	三日市　憲治	診療放射線技師	塩﨑　博人
医療事務員	中村　明日香	医療事務員	高橋　純子

2　平成 30 年度の業務実績　　（単位：人）

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
一般撮影	34,747	35,316	35,130
乳房撮影	494	455	418
ポータブル撮影	11,434	11,854	12,567
心臓カテーテル検査	1,154	1,192	1,104
その他血管造影	200	184	188
CT 撮影	20,683	21,493	21,924
MRI 検査	5,639	5,824	5,683
アイソトープ	977	915	870
骨塩定量	327	676	717
TV 撮影	1,128	1,417	1,586
結石破砕	536	549	527
放射線治療	3,562	3,549	3,573
口腔外科撮影	2,396	2,589	2,854
超音波検査	7,594	7,407	7,019

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
画像ファイリング	7,034	7,235	7,678
妊婦検診	2,290	1,978	1,813
病診連携	1,850	1,904	1,871

注：本年報の別ページ【９　業務概要(12)放射線撮影件数】は照射件数を記載



・ポータブル撮影、CT 検査、骨塩定量、TV 撮影、口腔外科撮影、画像ファイリングは増加となっている。特に病棟検査が増えている。
・一般撮影、血管造影検査、心臓カテーテル検査、MRI 検査、結石破砕、放射線治療、病診連携は横ばい傾向である。今期新たにアブレーションを開始した。結石破砕装置の入れ替えで一時的な件数の落ち込みを見たが治療成績は確実に向上している。
・乳房撮影、アイソトープ検査、超音波検査、妊婦健診は減少した。

３　来年度の課題

当科は更新間近な高額医療機器が複数有るため、計画的な更新ができるよう関係各所に働きかけ、充実を図れるよう努力する。

高度医療機器の利用促進に向けて院内外に働きかける。

複数のモダリティーに対応すべく人材育成を行い体制の強化を図る。

令和元年度　中央放射線科目標

「知識と技術を共有し、確かな信頼、安心な医療」

習得した知識や技術を共有し自己研鑽に努め、患者さんや当院のスタッフ、他院からの信頼が得られるよう安心安全な医療を提供する所存である。

（文責　髙木　省一）

■臨床工学科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技師長	西田　英明	主査	佐野　達哉
上席臨床工学技士	勝間田　賢	上席臨床工学技士	諏訪部　新
上席臨床工学技士	杉山　弘一	臨床工学技士	佐野　汐里
臨床工学技士	平柳　圭佑		

2　平成 30 年度の業務実績

	手術室業務			心カテ室業務（＊３）	ペースメーカー関連
	臨床業務（＊１）		保守点検業務（＊２）		
	定時	緊急			
28 年度	60	0	480	1,058	702
29 年度	52	5	525	1,108	777
30 年度	64	8	536	929	717

	ME 機器室業務（＊４）			血液浄化療法業務（＊５）
	呼吸器関連	心電図モニター関連	輸液ポンプ・吸引関連	
28 年度	906	35	5,628	100
29 年度	1,006	75	5,467	63
30 年度	852	107	5,136	192

ME 機器　教育研修実績（回数）

	28 年度	29 年度	30 年度
呼吸器・輸液ポンプ・IABP・CHDF 等取り扱い勉強会	11	34	34
手術室 ME 機器勉強会	7	2	3

＊１　主に心臓外科手術人工心肺操作、心臓血管外科・整形外科・脳神経外科などの自己血回収装置操作、PCPS 操作。

＊２　主に麻酔器、気化器、炭酸ガスモニタ、IABP、PCPS、人工心肺装置、血液ガス分析装置、除細動器の保守点検。

＊３　心カテ室業務は総数。ペースメーカー（PM）関連は「PM 外来」、「植え込み術」、「植え込み患者手術立会」、「植え込み後チェック」。

＊４　主に呼吸器組立、心電図モニター、輸液ポンプ類点検。

＊５　主に CHDF、PMX、PE、透析室以外での血液透析。

３　来年度の課題

本年度は、心臓カテーテル・アブレーション業務が開始された。当科では、呼吸療法認定士５名、透析技術認定士者４名、体外循環技術認定士２名、心血管インターベンション技師１名の認定取得者が在職し自己研鑽している。新たな業務に関しても、チームとして技術を共有し積極的に臨床業務に役立てていきたい。

病院全体の医療機器管理では、「人工心肺装置および補助循環装置」「人工呼吸器」「血液浄化装置」「除細動装置」「閉鎖式保育器」について医療機器管理業務の第一人者としての自覚を持ち、各部門との勉強会、実地講習等を通じ、医療技術の提供を行っていく。

令和元年度も、スタッフ間の連携を強化し「安心安全な医療技術の提供」をさらに進めていきたい。

（文責　池谷　幸一）

■リハビリテーション科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
参事補兼主任（作業）	中村　公美	主任(理学)	深澤　史朗
主査(理学)	和泉　裕美子	主査(作業)	竹川　圭亮
主査（言語）	幾嶋　邦人	上席言語聴覚士	石井　玲奈
上席理学療法士	小田　純市	上席言語聴覚士	佐野　弘美
上席理学療法士	山田　将史	上席理学療法士	鈴木　智乃
上席理学療法士	高橋　良太	上席作業療法士	渡邉　亜希子
理学療法士	若月　優	理学療法士	永嶋　泰玄
理学療法士	梅原　健人	作業療法士	杉山　かなた
作業療法士	大原　弘樹	作業療法士	中嶋　信夫
作業療法士	佐野　まなみ	言語聴覚士	宮川　真理子
医療補助員	鈴木　千智世		

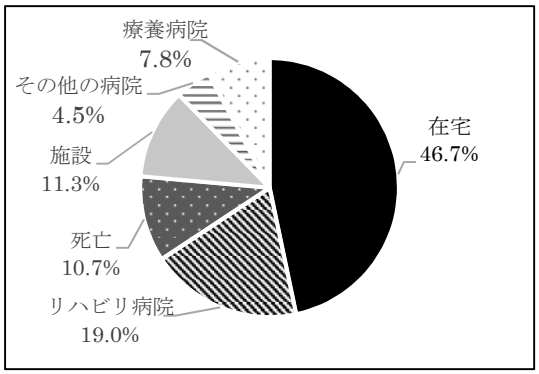
2　平成 30 年度の業務実績

・入院・外来患者に対するリハビリ実施単位数は本年報の別ページ【リハビリテーション実施状況】を参照。

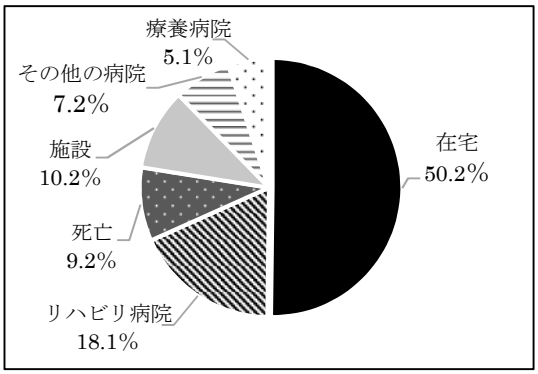
・平成 30 年度のリハビリ依頼件数は 2448 件（入院 2289 件・外来 159 件）で、リハビリ対象患者の見直しを行ったために平成 29 年度より 318 件減少した。

・リハビリ依頼の約 9 割を入院患者が占め、平成 30 年度の入院患者の疾患別割合は廃用症候群 52.1%、運動器疾患 27.9%、脳血管疾患 16%、呼吸器疾患 4%で、平成 29 年度とほぼ同じ割合だった。

・退院先は平成 29 年度と比較して、「在宅」「その他の病院」の割合が減少し、「リハビリ病院」「療養病院」「施設」「死亡」の割合が増加した。このことより、リハビリ対象患者の高齢化・重症化が推測される。



【平成 29 年度退院先】



【平成 30 年度退院先】

・リハビリ依頼からリハビリ開始までは 0.8 日（平成 29 年度 0.8 日）で、DPC 対象患者のリハビリ介入率は入院患者全体の 20.45%（平成 29 年度 22.03%）、リハビリ開始前後の FIM 改善値は平均 20.7 点（平成 29 年度 16.6 点）だった。
・３Ｃ・３Ｂ・６Ａ病棟では週に１回以上の病棟カンファレンスに参加し、そのほかの病棟では毎週金曜日のリハビリ回診に PT・OT・ST が各１名ずつ参加した。
・ICU 入室患者においては、毎朝多職種でのカンファレンスを行う事となり、リハビリスタッフもそれに参加した。
・褥瘡・NST（栄養・摂食嚥下口腔ケア）・呼吸器・緩和ケアの回診に参加した。
・適宜、患者・家族・ケアマネージャー等の他スタッフとのカンファレンスを行った。（平成 30 年度で 159 回）
・スタッフ間の治療技術・知識共有を図るためのリハビリテーション科勉強会を月に 1 回開催し、その他にも研修報告会等を開催した。
・看護学校の講師、公害予防事業の講師、市民向けの出前講座８回（骨折と転ばぬ為の身体づくり：３回、認知症の方との関わり方：３回、飲み込み障害のある方への対応とリハビリ：１回、簡単呼吸リハビリ：１回）を行った。
・院内では、病棟・他部門に対して「車椅子から撮影台への移乗方法」「高次脳機能障害について」「心疾患の早期リハビリ」「病棟で看護師が実践可能なリハビリ」「呼吸介助と体位ドレナージ」をテーマに講義を行った。

３　来年度の課題

・「心大血管疾患等リハビリテーション料」の施設基準取得を目指している。
・平成 30 年度後期にリハビリテーション運営委員会で、「リハビリ対象患者の適応基準の見直し」について検討したため、来年度は「適応のある患者に適切なリハビリを提供できる」ように進めていきたい。
・リハビリ回診から多職種カンファレンスへ移行し、多職種での情報の交換・共有を進めていきたい。
・早期リハビリテーション並びにチーム医療の推進を目指し、「リハビリ依頼からリハビリ開始までの日数：1.0 日未満を維持」「入院からリハビリ開始までの日数：6.0 日以内」「リハビリカンファレンス開催日数：年 150 回」「週 1 回の多職種カンファレンスへの参加」と目標を定めた。
・各回診への参加・学術研究・勉強会・出前講座等の講師は今までどおり行っていく。

（文責　中村　公美）

■栄養科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
主任（管理栄養士）	小俣　朋子	上席栄養士	古郡　朝子
上席栄養士	大山　実希	栄養士	菊地　実奈子

2　平成 30 年度の業務実績

（1）給食管理業務

・献立作成・発注・検収・材料仕込み・調理・盛り付け・配膳・下膳・食器洗浄の一連の給食管理業務は、平成 10 年より全面委託となっている。

・箸・スプーン及びマグカップの配膳に対し、返却数・破損状況の把握として、毎月第２土曜日の昼食後に数量確認、定数管理を行い不足分は補充購入とした。

・献立会議を毎週１回開催し、検食時の所見を考慮した改善策を協議。また嗜好調査を年４回、一般食・常食喫食者を対象に実施。調査結果を踏まえて改善策を講じ献立には季節感や行事食も取り入れ、よりよい食事提供ができるよう努めた。

・産科食は１日３食、その他一部の食種（一般食・常食、軟飯食、全粥食、高血圧食、塩分６ｇ制限食、学童食、学食）については１日朝・夕２食を毎日選択メニューで対応し、選択メニュー加算（１食 17 円追加）を実施した。

・小児アレルギー負荷試験の対応として、卵・乳・小麦に対する食物負荷試験食の提供を行うことにより、小児アレルギー食の個別栄養指導件数も増加している。

・産後ケア事業の対応として、入院実績ではないが常食の提供を行い対応している。

（2）栄養管理業務

・全入院患者の栄養管理状況の把握として必須となっている栄養管理計画書を毎日作成、年間作成患者数は 24,777 件となった。

・栄養サポートチーム加算の算定を開始して９年が経過した。NST 専任職員は昨年と同様に管理栄養士が担当している。
また、NST 回診、嚥下・口腔ケア回診、褥瘡回診にも参加（回診実績は別紙参照）し、チーム医療の活動を通して多職種との連携を強め、より患者個々に応じた食事内容、栄養計画の作成、栄養評価が可能となった。

・NST 活動を通じて他職種のスタッフとの連携が円滑に行われ、他部門との関わりとしての講師依頼数も増加した。

・講師依頼として、緩和ケア担当委員会の院内勉強会において講師を務めた。

・集団栄養指導として、腎臓病教室（腎臓病と食事）を年２回実施。

・個別栄養指導の業務実績は以下のとおりである。

表）個別栄養指導件数の推移と指導内容の内訳

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
個別栄養指導件数	734	747	819
栄養指導内容　内訳（件数）			
1	糖尿病及び合併症 (279)	糖尿病及び合併症 (218)	糖尿病及び合併症 (203)
2	CKD 及び透析 (98)	CKD 及び透析 (151)	CKD 及び透析 (133)
3	妊娠糖尿病 (65)	妊娠糖尿病 (68)	心臓・高血圧 (107)
4	消化管切除術後 (38)	高度肥満症及び肥満症 (58)	妊娠糖尿病 (82)
5	高度肥満症及び肥満症 (35)	嚥下食 (38)	消化管切除術後食 (65)

＊糖尿病及び合併症にはⅠ型糖尿病・糖尿病性腎症も含む。

＊その他として、嚥下食・高度肥満症及び肥満症・小児アレルギー食・脂質異常食・胆のう炎食などの件数が続き、低栄養・がんに対する栄養指導件数も増加した。

（３）実習生の受け入れ及び講師依頼

・富士調理技術専門学校より２名、日本短期大学部食物栄養学科より２名、岐阜女子大学健康栄養学科より３名、常葉大学健康栄養学科より２名の実習受け入れを実施。

・市立看護専門学校１年生の栄養学（調理実習も含）の講師を担当。

３　来年度の課題

（１）NST を通じて他部門との連携を強化し、病棟訪問も視野に入れ患者個々に応じた栄養管理の実践に努める。

（２）今後も経腸栄養剤や栄養補助食品等の見直しや検討を行い栄養管理に努めていく。

（３）栄養管理業務を実施する上で医療に関わる一員として、学会やセミナーに参加し認定資格の取得・維持をすることでより専門性を高めていくとともに、人材育成としても　“認定専門資格(＊)の取得”を目指す。

＊認定専門資格：

NST 専門療法士・TNT-D 認定管理栄養士・日本糖尿病療養指導士（CDEJ）

病態栄養認定管理栄養士・がん病態栄養専門管理栄養士・腎臓病療養指導士

高血圧・循環器病予防療養指導士　など　　（文責　小俣　朋子）

■医療技術科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
主任（視能訓練士）	平岩　弘子	主査（歯科衛生士）	北澤　美幸
主査（歯科衛生士）	長橋　あゆみ	上席視能訓練士	佐々木　麻理子
歯科衛生士	片瀬　未希	視能訓練士	岡野　夏菜
歯科衛生士	山口　千裕	歯科衛生士（R）	矢部　晴菜
歯科衛生士（R）	深瀬　冴香		

（R）は臨時職員

2　平成 30 年度の業務実績

（1）視能訓練士

・外来、入院患者に対する眼科検査（表１、２参照）

・脳ドック、健康診断（表３参照）

・月、火曜日の午後、手術室での眼科手術の介助

表１　（件）

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
矯正視力検査	8,346	8,396	8,171
眼鏡処方	93	225	186
角膜曲率半径測定	1,580	1,576	1,455
角膜形状解析検査	2	2	5
角膜内皮細胞顕微鏡検査	658	742	747
静的量的視野検査	1,083	1,156	1,183
動的量的視野検査	76	68	89
両眼視機能検査	177	179	142
眼底三次元画像解析	2,098	2,715	2,795
眼底カメラ	38	72	54
眼底カメラ（自発蛍光撮影法）	24	18	22
蛍光眼底カメラ（フルオと IA）撮影	68	49	46
超音波検査（Aモード）	164	175	173
超音波検査（断層）	27	24	43
中心フリッカー	165	146	124
定量色盲表検査	5	1	1
パネル D - 15	2	3	11

表１のつづき

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
網膜電位図（ERG）	2	2	2
視覚誘発電位（VEP）	1	1	1
理学　視能訓練（弱視、斜視）	6	55	105

表２　（人）

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
ロービジョン外来	7	3	2
オルオケラトロジー	1	5	6

表３　（人）

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
脳ドックにおける眼底撮影	45	46	40
健康診断	32	32	29

（２）歯科衛生士

①歯科口腔外科における外来業務

・外来診察のアシスタント

・外来外科手術の介助、準備、片付け、全身麻酔下における外科処置のアシスト

・障害者・有病者に対する外来歯科診療補助、全身麻酔下における歯科診療補助

・麻酔科診察時におけるアシスト、患者説明、検査データ確認

②口腔ケア・周術期口腔ケア

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
口腔ケア依頼件数	320	422	505
周術期口腔ケア依頼件数	185	219	273
合　計	505	641	778

③その他

・院内研修会の講師、富士市立看護専門学校の講師

・日本歯科衛生士会、認定歯科衛生士研修会への参加

・栄養サポートチームへの参加

＊認定専門資格

視能訓練士実習施設指導者

在宅療養指導、口腔機能管理、医科歯科連携

３　来年度の課題

（１）視能訓練士

・さらなる知識、技術の向上のため、学会や研修会への積極的に参加し認定視能訓練士資格取得を目指す。

・認定視能訓練士取得に向けて職場の環境作りや人材育成を目指したい。

・他部門のスタッフとの連携を充実させ安心安全で思いやりのある医療を目指す。

（２）歯科衛生士

・患者のうったえに傾聴し理解しやすい説明、対応を心掛ける。

・カンファレンス等でスタッフ間の情報共有を行い、業務をスムーズに行う。

・お互いに各委員会への参加が行えるよう連携し業務を行う。

・勉強会、出前講座の講師を継続して行う。

・各勉強会・学会に積極的に参加し自己研鑽に努める。

（文責　平岩　弘子・長橋　あゆみ）

■薬剤科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
薬剤科長	井出　宣孝	副薬剤科長	加藤　寛史
参事補兼主任	渡辺　浩臣	主任	三澤　延司
主任	大滝　哲也	主任	望月　保子
主任	川口　敬	主任	佐藤　実香
主査	木元　慎一郎	主査	阿部　一仁
主査	柴田　貴子	上席薬剤師	後藤　和美
上席薬剤師	岩本　一徳	上席薬剤師	松田　佑平
上席薬剤師	飛澤　香奈	上席薬剤師	小林　正典
上席薬剤師	池田　嘉隆	上席薬剤師	小坂　裕介
上席薬剤師	木村　佳弘	薬剤師	遠藤　大介
薬剤師	鈴木　岳瑠	薬剤師	藤井　文音
薬剤師	高橋　杏奈	医療補助員	高橋　純子
医療補助員	大箸　悦子	医療補助員	伊東　江里
医療補助員	望月　比呂子	医療補助員	望月　紅野

2　平成 30 年度の業務実績

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
薬剤管理指導料１　380 点	1, 344	3, 604	5, 949
薬剤管理指導料２　325 点	4, 874	6, 713	8, 216
退院時薬剤情報管理指導料　90 点	7	1, 359	2, 793
無菌製剤処理料１　180 点	2, 199	2, 351	2, 125
無菌製剤処理料２　40 点			499
特定薬剤治療管理料２　100 点			173
持参薬鑑別	7, 430	7, 674	7, 719
持参薬再調剤	2, 570	7, 126	8, 227
ＴＤＭ解析	636	433	546
院内製剤　　クラスⅠ		37	47
クラスⅡ		1, 162	584
クラスⅢ		47	58
院外処方せん疑義紹介	3, 572	2, 760	2, 809
注射薬個別払出し	314, 463	300, 800	319, 982

・高カロリー輸液の調製を実施し、無菌製剤処理料２の算定を実施した。
・レブラミド及びポマリストを投与している患者に、必要な指導等を行い特定薬剤治療管理料２の算定を実施した。
・新規治験を２件実施した。（小児科　第３相試験、外科　第３相試験）
・富士市内 11 施設の公立幼稚園で学校薬剤師としての業務を実施した。

資格取得一覧

認定団体	名　称	人数
日本病院薬剤師会	感染制御認定薬剤師	1
	病院薬学認定薬剤師	2
日本薬剤師研修センター	認定実務実習指導薬剤師	6
	小児薬物治療認定薬剤師	1
日本静脈経腸栄養学会	栄養サポートチーム専門療法士	1
日本糖尿病療養指導士認定機構	日本糖尿病療養指導士	1
日本腎臓病協会	腎臓病療養指導士	2

３　来年度の課題

病棟薬剤業務の定着化を早期に実現し、質の高いチーム医療を実行する。
・病棟薬剤業務支援体制の構築
・質の高いチーム医療の実現（回診への参加等）
・医師の負担軽減に向けた取り組みの検討

薬剤管理指導業務の推進に取り組む。
・薬剤管理指導料の算定件数の確保
・病棟間格差の是正方法の検討（標準化・日報）

医薬品在庫管理の適正化に取り組む。
・医薬品在庫額の削減を図る
・デッドストックの有効期限切れによる廃棄の削減
・注射薬の適正な管理を検討する

薬剤師の質的向上を目指し、さらなる自己研鑽に取り組む。
・自己研鑽推進に向けた学会、研修会等の参加の検討

（文責　加藤　寛史）

■看護部長室

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副院長兼看護部長 （日本看護協会認定看護管理者）	伊藤　すみ子	副看護部長（総務担当）	勝又　千壽子
		副看護部長（教育担当）	大石　悦子
		看護補助者	白井　美登里

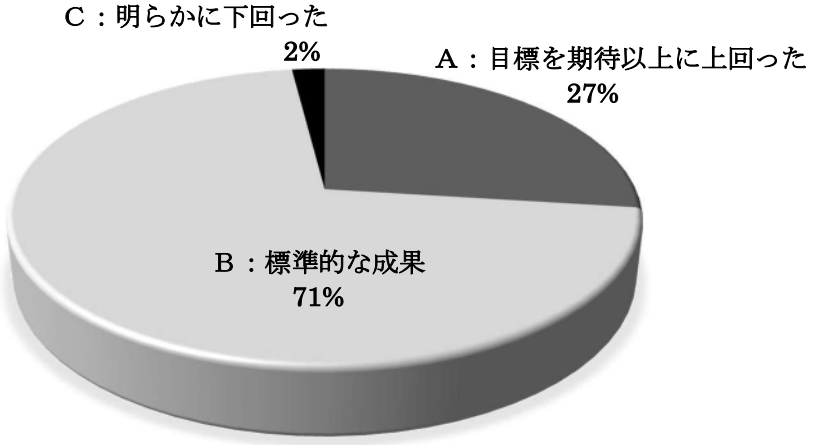
２　所属の特色

看護部長室には、副院長兼看護部長と２名の副看護部長、事務を担当している看護補助者の計４名が在籍している。スムーズな看護部組織運営のため、副看護部長は総務担当と教育担当に業務を分担している。看護部長室は必要な情報を的確かつ迅速に看護長へ伝達するとともに、看護長からの報告も徹底され問題解決に向けた対応をしている。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標「専門性と地域連携を強化し、繋がる看護の提供」

達成度評価



行動目標

１）知識・技術を深め質の高い看護を実践する

・急変時シミュレーションを 23 回／年実施した

・患者カンファレンスは月 30 件以上実施できた（目標は月 20 件）

・毎月計画的に勉強会を実施した(月１回・16 回／年)

・院内外の研修の伝達講習を 14 名 19 回実施した

・急変対応のシミュレーションをスタッフ全員が実施した

・毎週金曜日褥瘡評価カンファレンスを行い新規褥瘡の発生はなかった

・スタッフの院内研修は平均 11.6 回／年、院内研修 2.6 回／年出席できた
・リスク事例分析を３回／年実施した
・看護を語る事例検討会３件実施した
・手術後２病日の離床率 94.3%で目標達成できた
・全部署一次洗浄の中央化を実施した
・緊急度判定の勉強会にスタッフの 88%に実施した
・毎月災害チェックリストを使用し点検ができた
・NCPR のシミュレーションを１回／週実施した
・医師会主催の症例検討会で発表した
・認知症ケアカンファレンスを 15 件実施した

２）接遇力を高め、患者満足に繋げる
・倫理カンファレンスを月２回以上実施し身体拘束解除の検討を年間 68 件の実施
・２チームで５回／年伝達講習を行った
・倫理カンファレンスを８回／年、デスカンファレンス４回／年行った
・倫理カンファレンス 29 件、子宮内体内死亡患者のカンファレンスを４件実施
・「私の提案」の 97%がお褒めであった
・マナーの学習会を２回／年実施した
・すべての救急患者に受け持ち看護師となり丁寧な対応ができた
・患者サービス向上委員と協力し身だしなみや接遇についてチェックを行った
・接遇アンケートを作成し評価をした
・倫理カンファレンス 12 回／年、デスカンファレンス８回／年実施した
・倫理カンファレンス 14 回実施した
・退室後訪問を 71 件実施し看護の振り返りを行った
・手術後訪問を 91%実施し、８件のお褒めの言葉を頂いた

３）入退院支援の充実を図る
・退院前カンファレンス 14 回／年その内 10 回介護支援連携指導料が算定できた
・退院調整カンファレンス 202 件、看護サマリー162 件作成し地域ができた
・退院前訪問を２件実施した
・看護連絡表の活用が 60 件あり病棟、外来で情報共有ができた
・退院前カンファレンスを実施した（23 件・47 件）
・オムツ交換、吸引など６種類のパンフレットを作製した
・多職種リハビリカンファレンス介入率 25.8%となった
・内科 107 件、循環器科２件、小児科 17 件の看護連絡表で連携した
・MSW、転院連絡など 54 件の相談を行った

４　業務実績

	で　き　ご　と
４月	昇任　副院長兼看護部長１名、副看護部長２名（総務担当・医療安全）、看護長４名、参事兼副看護長２名、副看護長 17 名、主任８名、主査 12 名 ・看護長・参事兼副看護長再任用者の名称を専門員に変更 ・第３次採用試験６月採用（５名受験４名採用）
５月	・合同会議（働きやすい職場つくり） ・４Ｂ病棟変則２交代制勤務開始
６月	・新採用者辞令交付（４名） ・７階病棟へ看護事務補助者配置（１名） ・市の看護師実務研修への協力（６月～１月） ・平成 30 年度、第４次採用試験８月採用（４名受験３名採用） ・令和元年度採用試験（１次試験 24 名） ・育児部分休業の開始 ・４Ｂ病棟外来へ応援開始
７月	・令和元年度採用試験（２次試験８名） ・日本看護協会「認定看護管理者」取得（１名） ・インターンシップ（２名）
８月	・新採用者辞令交付（３名） ・高校生１日体験ナース（40 名） ・インターンシップ（15 名） ・学生アルバイト開始（１名５Ａ） ・高校生見学（３名）
９月	・病院機能評価受審 3rdG:Ver2.0（12 日・13 日） ・インターンシップ（３名）
10 月	・令和元年度採用試験（３次募集７名） ・県立こども病院助産師実習受け入れ（１名）10 月 15 日～19 日 ・合同会議（働きやすい職場つくり） ・主任会（主任としての管理の視点を明確にする） ・超過勤務時間を電子カルテ上の勤務表システムに入力開始 ・インターンシップ（２名）
11 月	・県立こども病院助産師実習受け入れ（１名）11 月 26 日～30 日 ・岳陽中学職場体験（７名） ・吉原第３中学職場体験（６名） ・がんセンターCN 実習受け入れ（２名）11 月 19 日～12 月 19 日

12 月	・学生アルバイト（１名７Ｂ） ・富士南中学校職場体験（６名）
１月	・静岡県立東部看護専門学校助産師養成課程教員の実務研修（３名）
２月	・元吉原中学校職場体験（６名） ・県立こども病院助産師実習受け入れ（１名）２月 25 日～28 日 ・主任会（主任としての管理の視点を明確にする） ・合同会議（働きやすい職場つくり） ・インターンシップ（１名）
３月	・インターンシップ（26 名） ・看護部総会を３月 28 日に実施 ・「皮膚・排泄ケア認定看護師の特定行為研修」終了　若林久美子

＊日本看護協会認定看護師

平成 18 年度	村松　由貴子	がん化学療法
平成 19 年度	望月　久子	手術看護
平成 22 年度	若林　久美子	皮膚・排泄ケア
平成 24 年度	村松　和歩	訪問看護
平成 24 年度	加藤　美奈子	慢性呼吸器疾患看護
平成 25 年度	本間　功武	感染管理
平成 26 年度	遠藤　さよ子	認定看護管理者
平成 26 年度	佐野　世佳	集中ケア
平成 28 年度	吉崎　美帆	皮膚・排泄ケア
平成 30 年度	伊藤　すみ子	認定看護管理者

＊特定行為研修終了者

平成 30 年度	若林　久美子	創傷管理関連・創部ドレーン管理関連 栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連

＊院内認定看護師

平成 25 年度	赤堀　崇代	退院調整

５　令和元年度の看護部目標

「看護実践力の強化と地域連携の充実」

行動目標

１．専門知識・技術に基づいた責任ある看護実践をする

２．高い倫理観を育成する

３．多職種と連携し入退院支援を行う

（文責　伊藤　すみ子）

■外来

1　スタッフ

役　　職	氏　　名	役　　職	氏　　名
看護長	野澤　里美	参事兼副看護長	田中　慶子
参事兼副看護長	田島　眞弓	参事兼副看護長	白戸　幸子
参事兼副看護長	白井　さつき	副看護長	戸塚　美晴
副看護長	渡邉　かおる	副看護長	若本　奈緒美
副看護長	藤田　久美子	副看護長（認定）	村松　由貴子
副看護長（認定）	若林　久美子	主任	小澤　花子
主任	仁藤　伸代	主任	望月　敦子
主任	大原　知子	看護師	74 名
准看護師	８名	看護補助者	47 名

2　所属の特色

外来は 23 科の一般外来と、通院治療室・人工透析室・内視鏡室・放射線科・救急外来で構成されている。内視鏡、放射線科では予定された検査・治療以外に、夜間休日など緊急時にも対応できる看護体制となっている。平成 30 年度は、内視鏡検査・治療 1,336 件、放射線科では心臓カテーテル検査・治療 1,188 件、その他血管造影 188 件が行われた。また救急外来では、地域の二次、三次救急を 24 時間体制で受け入れている。そのため、専門的知識・技術に基づく安全な医療が安心して受けられるよう努めている。

3　平成 30 年度目標および評価

目標：他部門との連携を図り、安心できる看護を提供する

評価：１）研修や勉強会に参加し、知識・技術を高め看護に繋げた

２）個々の倫理観を高められるよう倫理事例検討を７件実施した

３）円滑に診療が受けられるよう病棟や患者サポート室、検査部門、各科外来間で連携した

4　業務実績

・皮膚・排泄ケア認定看護師によるフットケア外来が開設し 119 件／年フットケアを実施した

・循環器科に不整脈外来が開設し 227 人／年が受診された

・新たにカテーテルアブレーション 28 件、運動器カテーテル治療４件が実施された

5　令和元年度の目標

専門性を発揮し、地域へ繋げる看護の提供

１）知識・技術を高めるため自己啓発に取り組む

２）優しく丁寧な対応を行い、患者満足度を高める

３）入退院支援を充実させる　　（文責　野澤　里美）

■手術室

1　スタッフ

役　　職	氏　　名	役　　職	氏　　名
看護長	森本　康江	参事兼副看護長（認定）	望月　久子
副看護長	石川　裕子	副看護長	伊藤　輝美
主任	芦川　牧子	主任	杉本　祐介
主査	８名	看護師	22 名
委託（日本ステリ）	４名	委託（NHS）	５名

2　所属の特色

当院手術室は、12 科の手術を、看護師 32 名（認定看護師１名含む）で、年間 3,938 件行っている。増加する鏡視下手術や昼夜問わない緊急手術に対して、安全な手術看護を提供している。

3　平成 30 年度の目標及び評価

目標　基幹病院手術室の役割を果たすべく、安全かつ円滑に手術を提供する

１）専門的知識を高めるため院内外研修の伝達講習を５回／年実施する

２）手術室運用を 330 件／日以上にする

３）全身麻酔患者の術後訪問を 85%にする

評価　１）院内外研修受講後の伝達講習は 11 件／年実施して情報の共有を行い、看護に繋げた

２）手術件数 3,938 件／年、月間手術運用は 328 件であった
開腹手術より鏡視下手術が増え、手術時間は要するが患者への侵襲は低い

３）全身麻酔患者の術後訪問は 91%であった

4　業務実績

１）術後推進チームの活動を基に全身麻酔患者の術後訪問率が 91%になった
術後訪問に関してお礼の言葉を８件／年頂いた

２）委託業者に委譲した業務（清掃、器械洗浄、物流管理）の軽減で時間を有効活用して手術間の時間短縮に繋げた

5　令和元年度の目標

目標　手術室の専門知識と技術を深め、安全かつ円滑に手術を提供する

１）勉強会を 10 回／年行い、院内外研修の伝達講習を 12 件／年実施する

２）倫理カンファレンスを４回／年実施する

３）月間手術運用を 335 件以上にする　　（文責　森本　康江）

■中央材料室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長（手術室兼任）	森本　康江	参事兼副看護長	後藤　光子
委託（日本ステリ責任者）	遠藤　真理子	委託（日本ステリ）	６名

2　所属の特色

中央材料室は、患者に安全な滅菌医材を提供するため、委託業者と協力し、院内で使用する医材の洗浄・消毒・滅菌業務（オートクレーブ・EOG・プラズマ）と病棟の検体や医材、伝票類，薬剤等の搬送業務を行っている。

3　平成 30 年度の目標及び評価

目標　患者に安全な滅菌・消毒医材を提供する

１）専門知識・技術の向上に努め、滅菌保証を高める

２）委託者と連携し、業務の効率化を図る

評価　１）一次洗浄中央化を全部署実施した。感染対策セミナー、中材業務研究会に参加し、業務改善に繋げた。高圧蒸気・EOG 滅菌の滅菌機や医材の経年劣化の修理や不良医材のメンテナンス対応を行い、現場に支障のないように努めた。日切れ対策として２重クルムを使用、細菌検査を行い滅菌保証の延長を実施している

２）毎日委託者と昼礼を行い、情報・事例共有から業務改善に繋げた

4　業務実績

１）一次洗浄中央化完全実施から器材の見直し、業務改善からコスト削減に繋がった。特に EOG 滅菌器材の削減ができた

２）医材洗浄評価から真空超音波洗浄機導入、管状器材洗浄効果向上に繋がった

5　令和元年度の目標

目標　患者に安全な滅菌・消毒医材を提供する

１）専門知識・技術の向上に努め、滅菌保証を高める

２）委託者と連携し、業務の効率化を図る

（文責　森本　康江）

■ＩＣＵ（集中治療室）

1　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	齋藤　幸子	副看護長	渡邉　葉子
副看護長	野澤　治	主任	佐野　陽子
主任	佐野　好美	主査	３名
看護師	14 名	看護補助者	１名

2　所属の特色

稼働病床は平成 28 年より６床となり、平成 30 年度の入室患者数は 359 名、病床稼働率 79.5%であった。科別では、外科 134 名、循環器科（心臓血管外科を含む）97 名、脳神経外科 77 名、内科 42 名、整形外科３名、産婦人科３名、泌尿器科２名、形成外科１名であった。看護体制はモジュール型継続受け持ち方式で、「高度な医療に対応でき、患者さん・ご家族に寄り添った看護を提供する」を病棟理念として、他部門と連携・協働し責任をもって看護を行っている。

3　平成 30 年度の目標及び評価

目標　「高度医療の充実を図り、多職種と連携して安心できる看護を提供する」

行動目標　１）アセスメント能力を充実させ看護実践に繋げる

２）あらゆる場面で相手を尊重した対応をする

３）多職種と連携して患者のセルフケア能力を高める

評価　１）病棟勉強会、院内外の研修受講者による伝達講習、開心術後や急変時のシミュレーション、多職種カンファレンスを多数実施し、アセスメント能力向上に努めた

２）退室後訪問や倫理カンファレンス等から患者対応について学習を深めた

３）早期離床に向けた取り組みを行い、リハビリ介入率が上昇した

4　業務実績

１）多職種による心臓血管外科術前および術後カンファレンス 68 件、倫理カンファレンス 14 件、褥瘡カンファレンス３件実施した

２）退室後訪問を 83 件実施して看護の振り返りを行い、その後に活かした

３）看護研究に取り組み、日本集中治療医学会で成果を発表した

5　令和元年度の目標

目標　「チーム医療を推進し､安心･安全な質の高いクリティカルケアを提供する」

行動目標　１）エビデンスに基づいたケアを実践する

２）あらゆる場面において倫理問題に気付く力を養う

３）多職種連携を深め退院後の生活を見据えた看護を提供する

（文責　齋藤　幸子）

■３Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	小野田　智恵子	副看護長	諸星　宮子
副看護長	田中　秀樹	主任	尾崎　悦子
主任	渡辺　まゆみ	主査	６名
看護師	27 名（臨時３名含む）	看護補助者	５名

２　所属の特色

３Ｂ病棟は、脳神経外科・泌尿器科 51 床と、感染病床６床を併設している。病気や障害と共に生きる患者・家族の思いに寄り添い、丁寧で優しい対応、安全で確実な看護、患者の自立支援に努めている。患者・家族と共にカンファレンスを行い、安心して療養生活が送れるよう配慮している。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標「看護の専門性を発揮し、患者・家族が安心して療養生活を送れる様支援する」

１）スタッフ個々が、知識・技術向上のため自己研鑽に励む

各チームで２回／年以上の勉強会を行い、脳外科・泌尿器科領域における知識・技術の向上に努めた

２）患者・家族を尊重した医療を実践する

看護師全員が３回／年以上の患者・家族参画型カンファレンス実施を目標に取り組んだ。患者・家族参画型カンファレンスでは、地域で生活するために患者・家族の思いを尊重した医療と看護の実践に向け取り組んだ。

３）カンファレンスの充実を図り、患者・家族の意思決定を支援する

退院支援カンファレンス、倫理カンファレンス、認知症ケアカンファレンス、デスカンファレンス等に取り組み、医師のインフォームドコンセントに同席を心掛け、患者の情報共有と患者の意思決定支援を目指した。

４　業務実績

１）患者・家族と共にカンファレンスを行った（79 例／年）

２）業務改善：看護補助者の作業環境改善と看護師の作業環境改善を行った

５　令和元年度の目標

「患者・家族に寄り添った責任ある医療を提供する」

具体策

１）専門知識・技術の向上に努める

２）互いに倫理観を高め合える職場環境を築く

３）カンファレンスの充実を図り、患者・家族の意思決定支援をする

（文責　中村　三千代）

■４Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	鈴木　早苗	副看護長	大井　洋子
副看護長	久保田　京子	主任	山下　かずみ
主任	菅原　早苗	主査（助産師）	５名
主査（看護師）	２名	助産師	10 名
看護師	５名	臨時看護師	２名
看護補助者	３名		

２　所属の特色

当院は地域周産期母子医療センターである。４Ａ病棟はベッド数 30 床の産科病棟であり妊婦、産婦、褥婦が入院している。今年度は 588 件の分娩に対応した。スタッフは患者が満足できる看護及び分娩を心がけ、多職種と連携し入退院前後の支援に力を入れている。ファミリークラスでは毎月、妊婦対象に「バースクラス」、立会い分娩希望夫婦対象に「ペアクラス」を開講し、産婦がバースプランに基づき満足できる出産となるように努めている。「助産ケアルーム」では出産前の妊婦指導、出産後の母乳相談を行っている。今年度は助産師の産後２週間健診を開始し、産後うつの予防に努め、宿泊型産後ケアの対応も始めている。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標「患者・家族に信頼されるよう専門性のある看護実践を行う」

１）知識・技術を深めるために自己研鑽する

・母乳、リスクマネジメント、帝王切開看護など 11 回の勉強会を実施した

２）一人ひとりを大切にした対応をする

・倫理カンファレンスを充実させ、倫理感性の向上に努めた

３）関連部署との連携を密にする

・薬剤師、ケースワーカーとの患者カンファレンスを週１回行った

・サマリーを 198 件フィランセ及び他自治体に送り連携を図った

４　業務実績

１）NCPR シミュレーション 40 回、勉強会 11 回を実施した

２）倫理カンファレンス 32 件　　ファミリークラス 35 回

デスカンファレンス４件

３）産後２週間健診 457 件　　母乳外来 175 件

退院前カンファレンス 152 件

５　令和元年度目標

「専門性のある質の高い看護を提供し、地域連携を強化する」（文責　鈴木　早苗）

■４Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	齋藤　正美	副看護長	滝澤　佐織
副看護長	渡邉　志津子	主任	西﨑　金苗
主任	松山　桃代	主査	６名
看護師	26 名	看護補助者	３名

２　所属の特色

４Ｂ病棟は、小児科・外科・整形外科・耳鼻咽喉科などの乳幼児から 15 歳以下の患児が入院している。ベッド数は、観察室・乳幼児・学童部屋 34 床と NICU（新生児特定集中治療室）10 床を含む 44 床である。NICU は、富士医療圏のハイリスク新生児を受け入れ、高度医療・看護を提供している。スタッフは「こどもの権利」を尊重し、患者・家族が安心して入院生活を送れるように、丁寧な対応を心がけている。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標「専門性を高め、信頼される小児看護を実践する」

１）知識・技術を深め、安全で安心できる看護を提供する

病棟勉強会 11 回／年、急変シミュレーション 23 回／年を実施できた

小児看護の知識・技術を共有し、根拠に基づいた看護を実践できた

２）丁寧な言葉と思いやりのある態度で信頼関係を築く

倫理カンファレンスやケースカンファレンスで看護の振り返りを行い、倫理的に適切な判断と行動について学び、責任ある看護の提供に努めた

３）他部署との連携を図り、継続した看護を提供する

４Ａ病棟、MSW、退院調整看護師と連携し、退院に向けた家族支援を継続できた

４　業務実績

１）愛育病院研修に１名が参加

２）院内学術集会発表：「卒後 2 年目看護師教育プログラムの作成」

３）業務成果発表：「処置室の作業環境を整える」

４）病棟勉強会：小児のアレルギー、呼吸器感染症、痙攣・意識障害、川崎病、新生児の呼吸循環、人工呼吸器管理、小児救急

５　令和元年度の目標

目標「専門性を発揮し、地域に繋げる医療と看護の提供」

１）専門知識・技術を深め、責任を持って看護を提供する

２）あらゆる場面で専門職として、倫理的に配慮し行動する

３）家族の思いに沿った退院支援を把握し、多職種と協働する

（文責　齋藤　正美）

■５Ａ病棟

１　スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	秋山　ゆかり	副看護長	冨永　美保
副看護長	持田　和美	主任	加藤　珠永
主任	神谷　ちとせ	主査	７名
看護師	25 名	看護補助者	６名

２　所属の特色

５Ａ病棟は耳鼻咽喉科・歯科口腔外科・婦人科・外科・内科の混合病棟である。患者・家族参加型カンファレンス（以下 CF）を行ない、患者一人ひとりの思いに寄り添う看護を提供している。スタッフはよく声をかけ合い働きやすい職場である。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標「個々の実践能力を高め、多職種の役割を認め連携を強化して、患者の“その人らしい”生活に繋がる看護を提供する」

１）専門的知識・技術を深め、根拠のある看護を実践する

病棟勉強会、受持ち患者のプレゼンテーションにより知識・技術を深めた。

２）看護師・多職種で情報共有し患者・家族の思いに配慮した優しい対応を行なう

多職種 CF を開催し、患者を尊重した看護・医療について共に考え実践に生かした。

３）入院時から退院まで多職種と連携して、患者と家族をつなぎ“その人らしい”生活を計画的に支援する

患者・家族参加型 CF を行い、入院時から患者・家族の思いを聴き尊重した看護を実践した。退院前訪問を２件実施し退院後の生活に合わせた支援を行った。

４　業務実績

１）患者・家族参加型 CF　７～10 件／月実施

２）多職種 CF：倫理５件、デス３件、認知症ケア 15 件、看護を語る３件

３）病棟勉強会：脳梗塞、慢性副鼻腔炎、エンゼルケアなど９件／年（参加率 55%）

４）業務改善：認知症ケア CF の推進、昼休憩時間確保に向けた時間管理、多職種による４分割法を用いた倫理 CF の導入、夜間安楽なオムツの試行

5　令和元年度の目標

目標「個々の看護実践力を高め多職種と連携・協働し退院後の生活を見据えた看護を提供する」

1）専門知識・技術に基づいた責任ある看護実践をする

2）多職種カンファレンスの充実を図り倫理観を育成する

3）入院時から多職種と連携して退院後の生活を考え計画的に支援する

（文責　秋山ゆかり）

■５Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	松山　早登美	副看護長	東川　真理
副看護長	遠藤　喜巳子	主任	河合　利枝
主任	佐野　幸代	主査	５名
看護師	28 名	看護補助者	４名

２　所属の特色

５Ｂ病棟は、ベッド数 56 床の外科病棟で、消化器や乳がんなどの手術のほか、検査や化学療法、緩和ケアなどを目的に入院している。周術期の看護をはじめ、化学療法、緩和ケア、人工肛門の管理などの専門的な知識、技術が求められる。私達は定期的に勉強会を実施し知識・技術の習得に努め、看護の質が向上し患者が安心して入院生活を送れるよう努めている。

３　平成 30 年度の目標及び評価

「地域との連携を強固し、患者・家族の思いを尊重した質の高い看護を提供する」

１）自己研鑽に努め質の高い看護を提供する

スタッフへの研修参加を勧め、全スタッフが６回／年以上参加した

人工肛門管理、内視鏡の勉強会を実施し実践に活かすことができている

２）倫理的配慮で対応する

看護を語る会を病棟やチーム会で１回／月実施し、看護を振り返り看護の質の向上に努めている

３）多職種と協働し継続した看護を提供する

今年度より患者参画型カンファレンスを導入した。さらに、退院調整カンファレンスで多職種との連携を図った。平均在院日数は 11.1 日であった

４　業務実績

自主研究において「新人スタッフに対してのストーマ指導」をテーマに活動し、新人スタッフが、患者に合わせたケアが提供できるように環境を整えた。また、緊急内視鏡に対応できるように勉強会を行った。変則２交代制勤務において業務調整を行い、一部深夜勤者を４人に変更した

５　令和元年度の目標

「専門的知識・技術を活用し、患者・家族を支える看護を提供する」

１）専門知・技術を追求し、患者・家族看護実践に繋げる

２）社会的責任を自覚し看護実践に繋げる

３）多職種との連携を図り入退院を支援する

（文責　松山　早登美）

■６Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	遠藤　里花	副看護長	小林　宏美
副看護長	田中　圭子	主任	木野村　信子
主任	原村　ゆき子	主査	４名
看護師	29 名	看護補助者	５名

２　所属の特色

６Ａ病棟は、血液疾患・内分泌・代謝系疾患の内科病棟である。無菌室２床が設置されており、化学療法とその看護を行っている。糖尿病患者に対しては、教育プログラムに則り正しい知識の習得と自己管理をサポートしている。多職種と退院調整カンファレンスを定期的に行い、患者、家族の思いに沿った看護が提供できるように多職種と協働し地域とつながる看護の提供に努めている。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標「多職種と協働し個々を尊重した看護を提供する」

行動目標　１）専門性のある質の高い看護を提供する

２）倫理面に配慮した接遇を実践する

３）多職種との連携を推進し退院支援の充実を図る

評価　１）定期的に勉強会を実施し、専門的な知識を身につけることができた

２）倫理カンファレンスを 21 回／年実施したことで倫理の関する問題を深く掘り下げて考えることができている

３）多職種とカンファレンスを２回／週実施し、患者・家族の意向に沿った退院支援に繋げることができた

４　業務実績

１）ウォーキングカンファレンスが定着し、安全管理が徹底され情報がチーム間で共有することができている

２）倫理カンファレンスでは、患者対応カンファレンス、デスカンファレンスを含め 21 件実施することができた

３）医師、看護師、薬剤師、リハビリスタッフが退院調整カンファレンスを２回／週実施し円滑な退院支援、調整を図った

５　令和元年度の目標

目標「看護の専門性を高め、入退院支援を充実させ地域と連携する」

行動目標１）専門知識を深め責任ある看護を提供する

２）倫理に配慮した看護が実践できる

３）多職種と共に患者・家族の思いに沿った退院支援が実践できる

（文責　芳野　由規子）

■６Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	小林　由美	副看護長	望月　真理
副看護長	前嶋　良子	主任	渡邉　弘江
主任	齋藤　薫美	主査	３名
看護師	27 名	看護補助者	５名

２　所属の特色

６Ｂ病棟は、腎臓・呼吸器系の内科病棟で、腎臓内科では血液透析・腹膜透析などの検査・治療、呼吸器内科は呼吸不全や肺炎などの検査・治療を行っている。腎臓内科では食事療法や治療の継続が必要なことがあり、自分らしい生活が送れるよう指導している。呼吸器内科では人工呼吸器の管理や在宅酸素療法を必要とされる患者への支援を行い安心安全な看護の提供を実践している。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標　専門的な知識を深め、安全で安心できる医療・看護を提供する

行動目標　１）知識技術を深めるよう年 12 回の勉強会を実施する

２）患者の思いを傾聴し、患者満足に繋げる

３）地域医療連携センターと協働し、早期からの退院調整を図る

評価　１）勉強会を年間 15 回施行し、院内外の研修は、１人年間７回以上参加した急変時のシミュレーションや防災訓練は年　回実施した

２）倫理カンファレンスを月１回実施し、倫理感性を高めた。また、退院前カンファレンスを年間 22 回実施し情報共有したことで個別性のある看護実践に繋げることができた

４　業務実績

１）事例検討：倫理カンファレンス年 12 回　デスカンファレンスン年３回

２）病棟勉強会：腎疾患・透析療法・呼吸器疾患・人工呼吸器の取り扱い・看護ケアについてなど年 15 回実施

５　令和元年度の目標

多職種との連携を深め安全で安心できる医療の提供

１）専門的知識・技術を深めるよう年間 15 回の勉強会を実施する

２）倫理カンファレンスを年間 12 回実施し倫理的配慮ができるようにする

３）退院調整を多職種と共に実施し患者家族の満足に繋げる

（文責　小林　由美）

■７Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	勝山　弘子	副看護長	芳野　由規子
副看護長	増田　満伯	主任	新名　美佐子
主任	本多　すみ江	主査	３名
看護師	27 名	看護補助者	５名

２　所属の特色

７Ａ病棟は、循環器内科・心臓血管外科及び結核病床 10 床を含む病棟である。心臓カテーテル検査・治療及び心臓血管外科手術を目的とした患者に対し、専門的知識に基づいた医療・看護を提供している。また、患者を生活者と捉え、その人らしさを大切にした療養生活が送れるよう、多職種と連携を図っている。

３　平成 30 年度の目標及び評価

「専門性を活かしたチーム医療と退院支援を充実させ繋がる看護を提供する」

１）院内外の研修に積極的に参加し知識・技術を向上させ、実践に役立てる
院内の研修に年間１人 11 回以上・院外の研修に年間１人２回以上参加し、知識・技術を向上させ実践に役立てることができた

２）倫理カンファレンスを充実させ実践に活かす
入院患者からの「私の提案」投稿数 232 件の内「おほめ」は 88%だった。医師、看護師とも「丁寧で分かりやすい説明」等具体的な内容もあった

３）多職種と共に患者・家族の思いに沿った退院調整が実現できる
多職種とのカンファレンスを毎週定期的に行い、治療経過に沿った看護の提供と円滑な退院支援の充実を図った

４　業務実績

・倫理カンファレンス８回／年・デスカンファレンス４回／年
・病棟勉強会を教育委員が中心となり 11 回／年開催
・業務改善として床頭台の使用方法と患者必要物品の説明用紙を作成し療養環境の整備を行った

５　令和元年度の目標

「多職種と協働し、個別性を重視した専門的看護を提供する」

１）知識・技術の向上を図り実践に繋げる
２）倫理面に配慮した対応に努める
３）多職種と連携を図り退院支援を推進する

（文責　遠藤　里花）

■７Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	植松　和子	副看護長	勝又　祐子
副看護長	勝亦　由美	主任	風早　祥
主任	小林　拓巨	主査	７名
看護師	25 名	看護補助者	６名

２　所属の特色

７Ｂ病棟は消化器内科病棟で主に肝臓や胆道系の疾患、胃・腸・膵臓などの消化器疾患の患者が入院する。これらの患者は、超音波による肝生検・ラジオ波熱焼灼療法や内視鏡による治療などの最先端治療を受けている。また、夜間・休日の緊急内視鏡は病棟看護師が介助を行い、年間 20 件実施した。看護体制は固定チームナーシングで、患者の気持ちに寄り添い、きめ細かな対応で最善の看護を提供するために医師と共に医療・看護に努めている。

３　平成 30 年度の目標及び評価

病棟目標「チーム医療を強化し、安心・安全につながる医療を提供する」

１）消化器内科の知識・技術を深め、個別性のある看護を提供する
消化器内科に関する勉強会を 13 回実施し、知識・技術の向上に努め、個別性のある医療を提供することができた

２）倫理的感性を高め、接遇の充実を図る
身体拘束解除の検討を 68 件実施した

３）看護の役割を発揮し、多職種と連携を図り、入退院支援を行う
週に１回退院調整カンファレンスを実施し、多職種と連携を図り退院前カンファレンスを６回実施した

４　業務実績

１）緊急内視鏡検査に対応できるようシミュレーションの勉強会を行い、夜間や休日の緊急内視鏡検査の発生時に対応することができた

２）褥瘡対策ケアカンファレンスを毎週金曜日に実施し、新規褥瘡の発生数が７件から２件に減少し褥瘡予防に繋がった

５　令和元年度の目標

病棟目標「専門知識と技術を高め地域と連携し、心のこもった看護の提供」

１）消化器内科の知識・技術を深め、責任ある看護を提供する

２）あらゆる場面で倫理的に配慮した対応ができる

３）多職種と連携を密にし、入退院支援の充実を図る

（文責　勝又　祐子）

■３Ｃ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	柘植　範子	副看護長	齋藤　洋実
副看護長	小林　二十美	主任	諸星　美恵子
主任	野畑　圭子	主査	４名
看護師	26 名	看護補助者	５名

２　所属の特色

３Ｃ病棟は、整形外科・形成外科・眼科・皮膚科の混合病棟である。疾患により身体機能の障害を持つ患者が多いため、患者を生活の視点で捉え、基本的な日常生活援助を安全で丁寧に提供できる。またほぼ全員の患者にクリニカルパスを使用しており、診察や看護を患者と共有できる。また大腿骨地域連携パスを使用して地域の病院と連携している。

３　平成 30 年度の目標及び評価

目標「一人ひとりを尊重し、地域へ繋げる看護を提供する」

１）患者・家族の意見をふまえ良好な関係を築く

患者・家族からのご意見は 15 件の目標値を下回り、お礼の言葉や看護学生から実習環境について良い評価を受けることができた

２）多職種と情報を共有し地域と連携する

各カンファレンスの実施の目標値は達成できたが、リハビリテーションや転院の対応を、他職種に委ねてしまうことが多かった

３）知識・技術を高め、安全な看護を提供する

勉強会や事例検討は計画通りに実施できた

４　業務実績

・処置室や器材室、汚物室やナースセンターなどの環境を改善した
・病院機能評価で、患者一人当たりの身体拘束日数の減少の評価を受けた
・MDRPU 予防策について、褥瘡対策担当委員会実践報告会でよい評価を受けた
・自主研究として、３Ｃデイケアの検討を開始した

５　令和元年度の目標

「多職種と連携し、安全で確実な看護を丁寧に提供する」

１）各科の知識と技術を習得し看護の質を向上する

２）患者を尊重し個々の患者に合わせた看護を実践する

３）カンファレンスを充実し患者の希望沿った連携をする

（文責　柘植　範子）

■病院経営課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
事務部長	大沼　幹雄	課長	芹澤　広樹
経営企画担当調整主幹	玉舟　正弥	経営企画担当主幹	木内　啓人
経営財務担当主幹	宇佐美　雄二	上席主事	角入　あゆ美
上席主事	小池　博也	上席主事	清水　涼真
参与（R）	杉沢　利次	事務補助員（R）	志田　奈穂子
事務補助員（R）	前田　幸毅		

（R）は臨時職員

2　平成 30 年度の業務実績

＜業務＞

病院経営課は「病院経営の健全化を推進するため、経営分析及び経営改善を行う」、「病院の機能改善を推進するため、各種施策の企画立案と調整、病院職員の適正配置を行う」、「病院事業の予算を編成、執行を管理し、決算の調製を行い、資金計画を策定し管理する」の主要事業があり、以下の５事業を所管している。

（１）中央病院経営健全化推進事業　　（２）中央病院機能改善推進事業
（３）中央病院予算編成執行・会計決算調製事業　（４）中央病院会計出納管理事業
（５）部内調整事業

＜実績＞

経営企画担当では、公益財団法人 日本医療機能評価機構が実施する病院機能評価の受審を統括する病院機能改善委員会の事務局として、各部門と協力しながら進行管理を行い、「病院機能評価 機能種別版 評価項目 3rdG:Ver2.0 一般病院２」の認定を更新した。

また、経営改革推進委員会の事務局として、平成 26 年度に策定した第二次中期経営改善計画に続く、令和元年度からの第三次中期経営改善計画を策定した。

経営財務担当では、平成 29 年度決算書及び令和元年度予算書の調製を行った。

3　来年度の課題

経営企画担当では、第三次中期経営改善計画の事業計画の進行管理に取り組むとともに、新規事業に関する院内調整を図る。

また、老朽化が進む病院施設の建替えに向けた検討を進める。

経営財務担当では、予算・決算の調整を行うとともに、予算の適正な執行管理を行う。

（文責　芹澤　広樹）

■病院総務課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	渡辺　利英	総務担当統括主幹	伴野　晃仁
人事担当統括主幹	鈴木　裕子	施設物品担当統括主幹	中川　貴裕
総務担当主幹	秋山　英希	人事担当主幹	佐野　昌哉
施設物品担当主幹	堤　恭子	主査	加藤　菜緒
主査	井出　大介	上席主事	中村　崇人
上席主事	佐山　侑希	技師	岩間　雄一郎
主事	青木　孝介	主事補	市川　恵未
業務員（R）	加藤　猛	業務員（R）	大石　昌男
事務補助員（R）	松井　みゆき	事務補助員（R）	坪井　美千代
事務補助員（R）	佐野　友理子		

（R）は臨時職員

2　平成 30 年度の業務実績

病院総務課の業務は、病院運営を円滑に進めるための管理事業を主な事業としている。総務担当、人事担当、施設物品担当の３担当を構成し、総務担当は病院全体の庶務・開設許可事項等の許認可申請、人事担当は人事・福利厚生関係、施設物品担当は施設整備や物品購入を主な業務としており、以下の 13 事業を所管している。

（１）中央病院運営事業　（２）中央病院事務管理事業
（３）中央病院人材活用事業　（４）中央病院勤務条件整備事業
（５）中央病院給与支給事務事業　（６）中央病院職員福利厚生事業
（７）中央病院安全衛生管理事業　（８）中央病院職員研修事業
（９）中央病院市有財産管理事業　(10) 中央病院環境整備事業
(11) 中央病院院内保育所運営事業　(12) 中央病院施設管理事業
(13) 中央病院防災対策事業

3　来年度の課題

引き続き、医師をはじめとした医療従事者の確保に取り組むとともに、高度で専門的な医療を提供するため、職員の人材育成に努めていく。

施設及び設備については、維持管理を適切に行い、施設機能の保持に努めていく。

災害対策事業は、災害拠点病院としての基盤強化を目的に、富士市地域防災計画等に基づく訓練の実施、富士市立中央病院地震防災計画の見直し、災害対策用設備及び資機材等の配備を計画的に進めていく。

（文責　渡辺　利英）

■医事課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	森　育洋	診療録管理事業（R）	寺尾　由梨香
統括主幹	寺田　和子	診療録管理事業（R）	菊地　美穂
主査	岡本　功	手術室代行入力（R）	河野　あかね
上席主事	杉山　彩	システム管理（R）	赤池　春香
主事	川本　悦子	医師事務作業補助者（R）	芦澤　典子
主事	川口　愛美	医師事務作業補助者（R）	飯塚　有紗
主事	高田　恭平	医師事務作業補助者（R）	生駒　久美子
診療情報担当統括主幹	塩澤　忠生	医師事務作業補助者（R）	内田　裕子
診療情報担当主査	露木　秀俊	医師事務作業補助者（R）	佐野　秀美
主査（診療情報管理士）	島田　英介	医師事務作業補助者（R）	佐野　由美子
上席主事(診療情報管理士)	齋藤　智恵美	医師事務作業補助者（R）	清水　みどり
主事(診療情報管理士)	佐野　元美	医師事務作業補助者（R）	髙田　菜摘
渉外室長（R）	加藤　裕司	医師事務作業補助者（R）	髙室　まゆみ
渉外担当（R）	望月　加津典	医師事務作業補助者（R）	槌屋　有希
通訳（R）	鈴木　智美	医師事務作業補助者（R）	橋谷　理恵
事務補助員（R）	柴﨑　香苗	医師事務作業補助者（R）	古郡　直美
事務補助員（R）	守屋　理恵	医師事務作業補助者（R）	宮田　由香
診療録管理事業（R）	市川　もと枝	医師事務作業補助者（R）	望月　美佐
診療録管理事業（R）	阪藤　千晶	医師事務作業補助者（R）	望月　美咲
診療録管理事業（R）	小林　朱美	医師事務作業補助者（R）	原田　祐紀
診療録管理事業（R）	西川　麻衣	医師事務作業補助者（R）	山田　美保
診療録管理事業（R）	藤原　真里子		

（R）は臨時職員

2　平成 30 年度の業務実績

医事担当は、患者に良質な医療及びサービスを提供するための受付等の窓口事務と診療報酬の請求、診療情報担当においては、医療情報システムの管理運用、診療記録・医学情報管理、統計資料の作成による病院事業の多面的な分析等を主な業務としており、以下の８事業を所管している。

（１）中央病院窓口事業　　（２）中央病院外国人患者対応事業
（３）中央病院診療報酬請求事業　　（４）中央病院診療録管理事業
（５）中央病院医事統計資料作成管理事業　　（６）中央病院医師事務補助事業
（７）中央病院情報システム管理事業　　（８）中央病院 ICT 化推進事業

教育・研修

医事課では、診療情報管理士が専門職としての質の向上を目指し、院外研修へ積極的に参加した。

診療情報管理士研修

開催日	研　修　名	開催地
６月２日	患者安全・医療の質向上のための情報共有について	大阪府
６月16日	静岡医療 IT 利活用懇話会	静岡市
７月28日	CAPE 褥瘡予防ケアセミナー	東京都
８月９日	がん登録実務者中級認定者研修	東京都
９月２日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
９月20-21日	日本診療情報管理学会　学術大会	新潟県
10月12-14日	腫瘍分類学コース	東京都
11月18日	診療情報管理士生涯学習研修会	東京都
１月12日	愛知県院内がん登録研修会	愛知県
１月19日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
２月９日	保険診療と審査を考えるフォーラム	静岡県

３　来年度の課題

次期診療報酬の改定に備え、早期から情報を収集し、各部門と連携を図り、新たな施設基準の取得に努める。

診療情報担当においては、医療情報の有効利用及び処理の効率化を図るため、病院の ICT 化を推進する。また、医師の「働き方改革」の一環である事務作業の軽減を図るため、各診療科から請負う臨床データベース（NCD）の入力業務を徐々に拡張する。

（文責　玉舟　正弥）

■地域医療連携センター

1　スタッフ

役　職	氏　　名
センター長	遠藤　さよ子

〔地域医療連携室〕

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
室長兼看護長	中村　三千代	統括主幹	岩垣　哲也
主任	赤堀　崇代(＊1)	看護師	加藤　浩子
看護師	中野　友美	看護師	高澤　美代
看護師	竹川　裕香	看護師	齋藤　香須美
看護師	浅沢　美由樹	ＭＳＷ	佐藤　理絵
ＭＳＷ	遠藤　卓馬	ＭＳＷ	前嶋　真理子
専門員	村松　和歩(＊2)	専門員	渡辺　野利江(＊3)
事務補助員(Ｒ)	遠藤　京子	看護補助員(Ｒ)	佐野　順子

(＊1)院内認定退院調整看護師　(＊2)訪問看護認定看護師　(＊3)在宅医療･介護連携コーディネーター

〔患者サポート室〕

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
室長兼看護長	大塚　君子	副看護長	渡邉　裕子
主幹	加藤　千代美	主幹(MSW)	江村　宏子
専門員	今野　美枝子	専門員	佐野　まりこ
看護師(Ｒ)	佐藤　美智子	看護補助員(Ｒ)	松下　治美
看護補助員(Ｒ)	濱田　ひろみ	事務補助員(Ｒ)	佐野　美華

（Ｒ）は臨時職員

2　平成 30 年度の業務実績

〔地域医療連携室〕

目標：

患者･家族が安心して治療が受けられ､安心して地域で暮らせる支援を提供する

行動目標：

1）患者・家族の意向に寄り添った、在宅支援・退院支援を実践する

2）専門性を活かし、多職種連携の充実を図る

3）高度医療機器・紹介患者診療予約の利用の推進

評価：

各職種の専門性を活かし、患者・家族の意向に寄り添った支援を提供した。

平成 30 年度から市の委託「在宅医療・介護連携相談窓口事業」を周知、地域の会

議・研修会への参加、症例検討会の開催により地域連携の充実を図った。また、高度医療機器・紹介予約枠の利用状況を医師会に提示し、利用の促進に努めた。

実績：

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
退院調整スクリーニング件数	5,814	6,304	6,298
退院調整患者数	2,383	1,830	1,994
訪問看護実患者数	73	74	74
延べ訪問看護回数	1,388	1,816	1,826
在宅医療・介護相談件数	－	－	64
高度医療機器共同利用数	1,815	1,815	1,795
紹介患者予約枠利用率（%）	37.7	38.3	41.0

〔患者サポート室〕

特色：

専門的な知識を持った看護師と医療ソーシャルワーカーが、患者及び家族が安心して療養生活を過ごせるよう、入院前より不安や悩みに関する相談に応じている。また、市内外の医療機関からの紹介患者のファックスによる紹介受付、高度医療機器利用申し込み受付を行っている。多職種が協同し、より良い支援に努めている。

目標：

各専門職が協働し、患者･家族に専門性を活かした丁寧で質の高い支援を提供する

１）患者サービス関連の研修に各自 1 回参加する

２）入院前支援の充実、担当科の拡大を図る

３）がん患者サロン新規参加者増加を推進する

評価：

１）患者サービス関連の研修にサポート室職員すべて参加することができた。

２）入院前支援については、2 科（外科・泌尿器科）を対象に行い件数を増やすことができた。

３）がんサロンの新規参加者は予定数には満たなかったが、がんサロン当日に院内放送で参加の呼びかけを行った結果、参加者が増えた。

実績：

１）毎週 1 回総合相談カンファレンスを実施した。
総合相談件数は 7783 件／年、うち看護相談 7310 件であった。

２）入院前支援を 11 月より 166 件行い内 123 件が入院時支援加算となった。

３）ファックスを用いての紹介患者受付件数は 3748 件／年、病診連携高度医療機器利用件数は 1795 件／年であった。

３　来年度の目標

〔地域医療連携室〕

安心して地域で暮らせる支援を提供する

行動目標

１）患者・家族の意向に寄り添った在宅支援・退院支援を実践する

２）専門性を活かし、多職種連携の充実を図る

３）高度医療機器・紹介患者診療予約の利用推進

〔患者サポート室〕

患者・家族が安心して医療が受けられる様、多職種との連携を強化し、それぞれの専門性を発揮した質の高い支援を提供する。

１）患者・家族及び他施設からの様々な問題、悩み等の事例を共有し対応力を高める

２）入院前支援の拡充を図る

３）がんサロンの参加者を増やす

（文責　遠藤　さよ子）

■医療安全対策室

1　スタッフ

役　職	氏　　名
医療安全対策室長（副院長）	諸岡　暁
専従リスクマネジャー（副看護部長）	北島　美鈴
メンバー（兼務）	14 名

2　平成 30 年度の業務実績

1）インシデント・アクシデントレポートの集計、分析

年　度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
報告件数	3,151	2,730	3,201

2）医療安全相談

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
相談数	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	1

3）医療安全研修

・第１回「静脈血栓塞栓症予防について」７回開催　参加率 70.2%

・第２回「医療現場における個人情報の取扱い」５回開催　参加率 67.1%

4）医療安全関連講義

・看護部講義７回

・看護師実務者研修講義１回（市役所依頼）

・市立看護学校講義６回

5）医療安全情報

・院外からの医療安全情報を関係部署に配布し、情報の提供と周知

6）巡回および再発防止策

・院内の「救急カート」現状把握のための巡回

・リスク部会（転倒転落グループ）：各病棟に対しベッド周囲の環境調査の巡回
　結果はリスクマネジャーに返し安全対策を依頼

・リスク部会（薬剤・製剤グループ）：薬剤科に対し、監査システムの巡回後
　パンフレットを用いて、指差し呼称の指導の実施

・４Ａ病棟新生児室に対し、施錠忘れ防止策の依頼

・薬剤科と看護部に対し、「注射薬 KCL」の取り扱いの注意喚起

7）医療安全活動（マニュアル改訂含む）

・医療安全推進週間（平成 30 年 11 月 25 日～12 月１日　「転倒転落」をテーマに全職員に標語を募集し 381 作の応募があった。最優秀標語を 11 月中全職員が名札にいれることで医療安全の意識高揚に努めた。

・医療安全地域相互評価の実施
・「救急カート、タイムアウト、マーキング」マニュアルの作成
・「転倒転落フローチャート」作成
・「アナフィラキシー発見時のフローチャート」作成を薬剤科へ依頼

8）医療安全対策室たより発行（12 回）
・看護部の部署別種類別報告数を一覧表にし、コメントを付けて看護部リスクマネジメント担当委員会で配布した。

9）各委員会、各部署への依頼および啓蒙
・各担当医師に、放射線レポート未読状況の説明
・薬剤科に、「術前に休薬する当院採用薬一覧」を関係部署への配付の依頼
・総務課に、スタットコールの周知と「コール時の訓練（警備室）」の依頼
・総務課に、夜間休日のトイレ施錠の検討の依頼
・手術室運営委員会に、「体内遺残時のマニュアル」啓蒙の依頼

3　来年度の課題
・医療安全相談を患者・家族のみでなく職員からの相談にも応じ、問題の軽減に努める。
・医師からのインシデントレポート提出件数を全体の１割をめざす
・救急カート、タイムアウト、深部静脈血栓症（DVD）マニュアルの遵守確認のため、巡回を実施する。

（文責　諸岡　暁）

■院内感染対策室（ＩＣＴ）

1　スタッフ

役　職	氏　　名
室長	後藤　博一（総括部長兼泌尿器科部長兼感染対策室長）
専従	本間　功武（感染対策専従看護師）
メンバー	18 名

2　平成 30 年度の取組実績

（1）ICT 定例会　12 回（毎月 1 回、第 4 水曜日）

（2）耐性菌対策評価ラウンド（平成 30 年 1 月より毎週火曜日）

（3）院内感染対策室（ICT）によるラウンドを実施

ICT ラウンドは毎週水曜日に実施した。ラウンド時に手指衛生の遵守を指導し、年間の手指衛生指数は 16.99 となり昨年度より 1.79 ポイント上昇した。それに対し、MRSA 分離率は 4.51 となり 0.24 ポイント下降した。

今後も適切な指導と職員一人ひとりが標準予防策を意識できるようラウンドを実施していく。その他にも耐性菌（MRSA・MDRP）ラウンド、耐性菌対策評価ラウンド、血流感染ラウンドを実施した。

（4）ICT 主催による職員対象感染対策研修会の開催

①内　　容：「ザクッと理解しよう　抗菌薬の適正使用」

開 催 日：平成 30 年 10 月 30 日（火）

平成 30 年 11 月 12 日（月）（DVD 上映）

平成 30 年 11 月 26 日（月）（DVD 上映）

講　　師：浜松医療センター副院長　矢野邦夫医師

参加人数：554 人

②内　　容：「災害医療と感染管理」
開 催 日：平成 30 年１月 22 日（月）
平成 30 年２月　１日（木）
平成 30 年２月 20 日（火）
講　　師：坂総合病院　感染管理認定看護師　残間由美子（DVD)、本間　功武
参加人数：684 人

（５）感染対策地域連携カンファレンスの開催【全４回実施】

４施設の感染防止対策加算２取得医療機関【川村病院、湖山リハビリテーション病院、富士整形外科病院、大富士病院】と連携し、感染防止技術の向上や最新知見の周知に貢献した。

カンファレンス開催日時
①平成 30 年　５月 30 日（水）18 時より　　中央病院（大会議室）
②平成 30 年　８月 22 日（水）18 時より　　中央病院（大会議室）
③平成 30 年 11 月 28 日（水）18 時より　　中央病院（大会議室）
④平成 31 年　２月 27 日（水）18 時より　　中央病院（大会議室）

（６）感染防止対策地域連携加算を取得し共立蒲原総合病院、富士宮市立病院との相互評価を実施
①平成 30 年 11 月 14 日（水）富士市立中央病院の評価　富士宮市立病院が来院
②平成 30 年 11 月 20 日（火）共立蒲原総合病院の評価　富士市立中央病院が訪問

（７）サーベイランスの実施
①検出菌サーベイランス【JANIS】　②SSI サーベイランス【JANIS】
③ICU サーベイランス【JANIS】　④手指衛生指数サーベイランス
⑤血流感染サーベイランス

（８）感染症診療に対する対策

保健所と連携を密にし MERS 疑いや麻疹・風疹疑い症例に対し適切な感染防止対策を実施し診療した。

３　来年度の課題

AST（抗菌薬適正使用支援チーム）を早期に立ち上げ、院内で検出されている全ての耐性菌に対し抗菌薬の使用状況と医師からの抗菌薬に関するコンサルテーションを受けることができるよう整備していく。職場の環境改善と感染防止策の遵守率向上を図り、医療関連感染の発生低減に努める。さらに、最新知見を導入したマニュアルを再考し、効率的かつ確実な感染防止策を導入する。

サーベイランスを継続し、感染症の発生やその原因菌に関するデータを継続的に収集・分析し、必要な対策を講じ当該部署にフィードバックする。また、近隣施設からの相談等にきめ細かく応じ、地域医療の向上に貢献していく。

（文責　後藤　博一）